

2. 調査の成果

調査対象地は大内町中山80-1番地外の四国横断道路建設予定地で、5,930㎡の面積を調査した。調査前の地目は全て水田である。

地形的には西から東へ緩やかに傾斜する平坦地で、調査区を東西に横切る低地帯が存在し、その北側は北方から延びる丘陵の裾が、南側は緩やかな微高地が認められる。ただし、調査前の地形ではいずれも削平が著しく、平坦な状況を呈していた。調査区は中央に北側の集落へ入る道が存在するため、その西側と東側で分けし、西側をⅠ区・東側をⅡ区とした。また、さらにⅠ区を南北に長い短冊形に3分し、西から①区、②区、③区とした。Ⅱ区も同様に2分し、西から①区、②区とした。

当遺跡は現在調査中であり、主としてすでに調査の終了したⅠ区-①・②およびⅡ区-①・②の成果について記載する。いずれの調査区も主として奈良時代および中世の遺構・遺物が出土している。

(1) 調査区概要

Ⅰ区-①・②

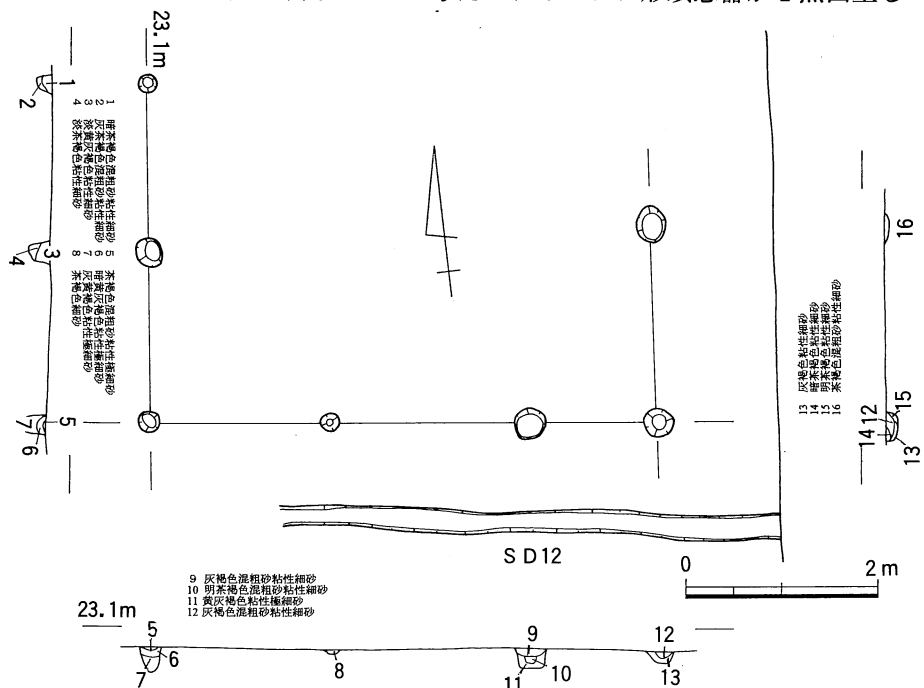
検出した遺構は掘立柱建物、溝状遺構、井戸、ピット、土坑、池、自然流路である。遺物は溝状遺構・自然流路を中心に奈良時代の遺物が出土しているほか、池から近世の遺物が出土した。また、特筆する点として包含層から奈良時代のものと考えられる刻印のある須恵器杯片が出土した。

Ⅱ区-①・②

検出した遺構は掘立柱建物、溝状遺構、井戸、自然流路である。遺物は他の調査区同様、溝状遺構・自然流路から奈良時代の遺物が出土している。また、1条のみ南北方向の溝状遺構から中世の遺物が出土したほか、遺物が細片であり詳細は不明であるが埋土の状態から近世のものと考えられる井戸を検出した。また、特筆する点として、包含層中から奈良時代のものと考えられるコップ形須恵器が1点出土した。

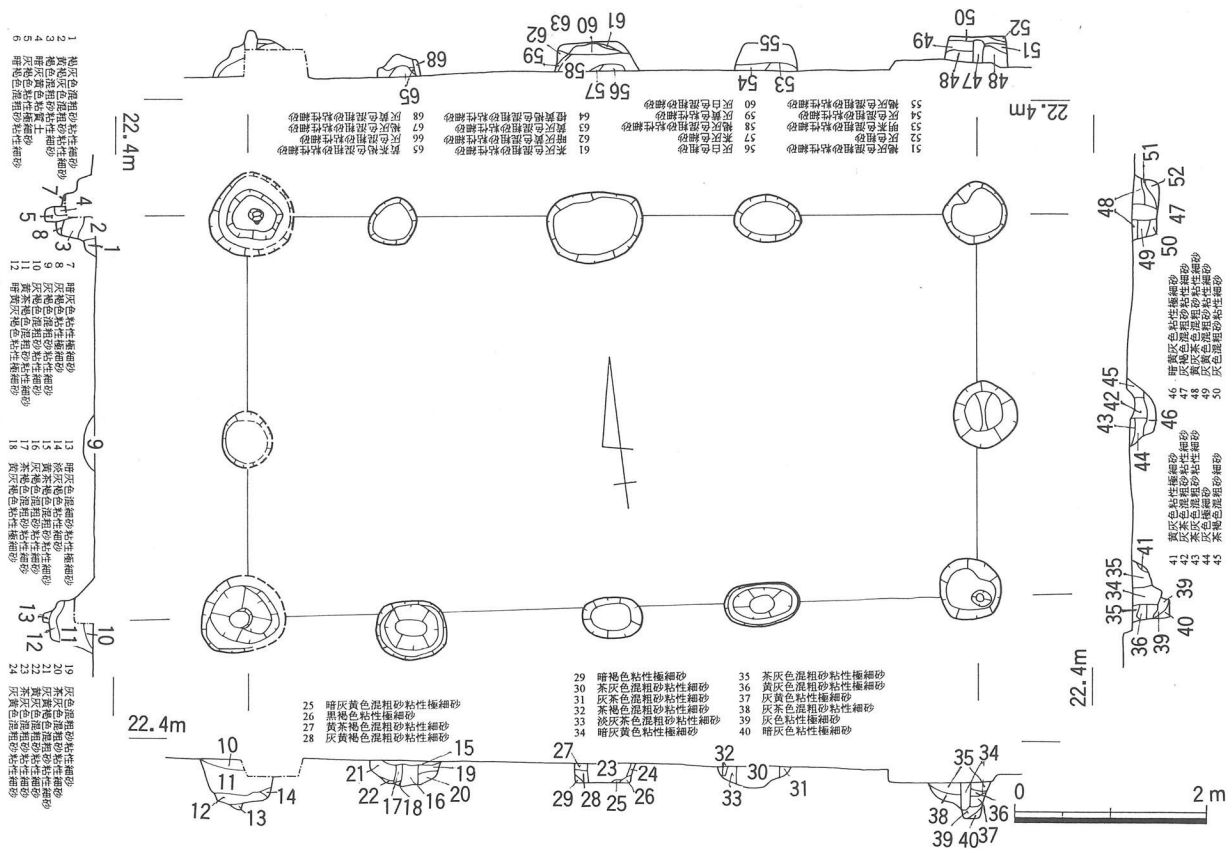
(2) 奈良時代

S B04 Ⅰ区-②東端中央付近で検出した東西棟の掘立柱建物である。北側の柱列が一部削平されており、詳細は不明であるが2間(4.5m)×3間(6.8m)の規模を持つと想定できる。主軸方位はN83°Wを測る。柱穴掘形平面は楕円形あるいは円形を呈する。この掘立柱建物の南側にS D12が



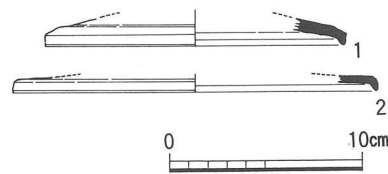
第52図 S B04平・断面図 (1/80)

存在するが、深さが約2cm程度と浅いため、雨落ち溝である可能性が考えられる。



第53図 SB06平・断面図 (1/80)

SB06 II区-②南西隅付近で検出した東西棟の掘立柱建物である。2間(5m)×4間(10m)の規模を持つ。主軸方位はN84°Wを測る。柱穴内からは、細片であるが須恵器杯蓋(第54図-1),土師器杯・甕が出土している。これらの遺物から7世紀末から8世紀初頭の建物であると想定できる。



第54図 SB06(上)・SB07(下)出土遺物(1/4)

SB07 II区-②南端中央付近で検出した東西棟の掘立柱建物である。1間(4.8m)×3間(9.5m)の規模を持つ。主軸方位はN84.5°Wを測る。柱穴掘形平面は円形ないし楕円形を呈する。SB06を切り込んでいることからSB06より後出するものである。柱穴内からは須恵器杯蓋(第54図-2),土師器が細片で出土している。須恵器杯蓋から8世紀前半の建物であると想定できる。

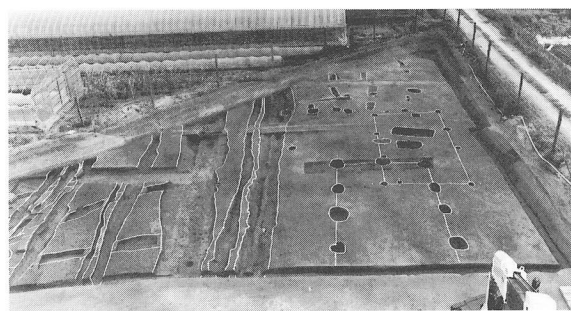
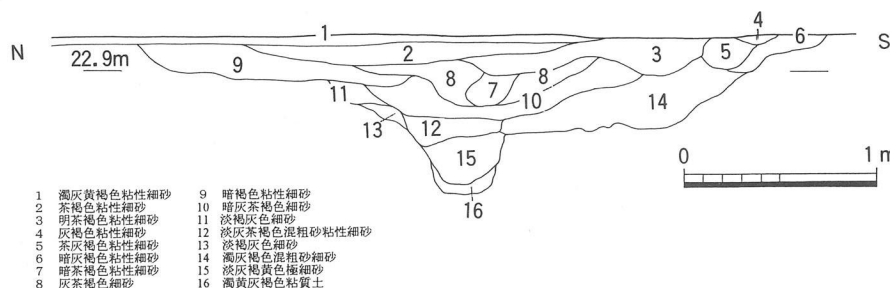


写真44 SB06・07, SD08・09, SR02遠景(西から)

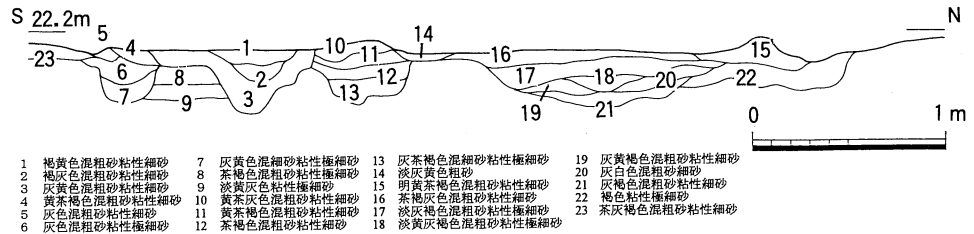
SD18 I区-②南端で検出した東西方向に走る溝状遺構である。西側はI区-①から続いている。深さは平均約0.8mを測り、断面



第55図 SD18土層断面図 (1/40)

形は底部付近で箱形になる緩やかなU字状を呈する。箱形になる部分はほぼ一直線に延びており、元々箱形であった溝が埋没するに従い、浅く幅広になっていった状況が想定できる。ここからは埋土中層・下層から8世紀前半を中心とする土師器杯、甕・須恵器杯などが出土しているほか、わずかに弥生時代の遺物が混じる。溝の最終埋没は概ね8世紀中頃と考えられる。

SD19 II区-②中央やや南寄りで検出した東西方向に走る溝状遺構である。西側はII区-①から続



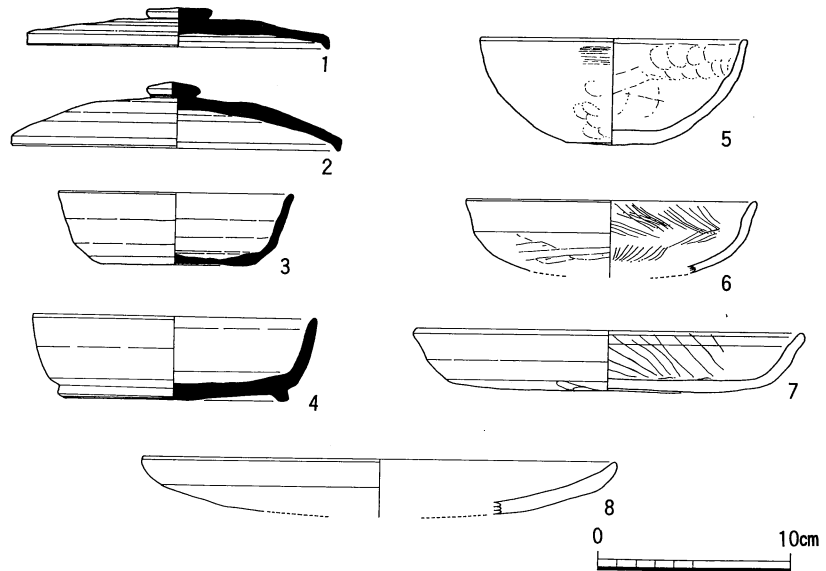
第56図 SD19・SD08・SR02土層断面図 (1/40)

いている。幅平均約1m、深さ平均約0.4mを測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土は褐色形の粗砂混じり粘質土が中心となる。遺物は、8世紀前半を中心とする須恵器・土師器がいずれの層からも出土した。特に、溝底部直上で土師器皿(第57図)・甕が比較的良好な状態で出土している。この溝状遺構は、西側で自然流路SR02を切っており、この流路に後出するものと考えられる。



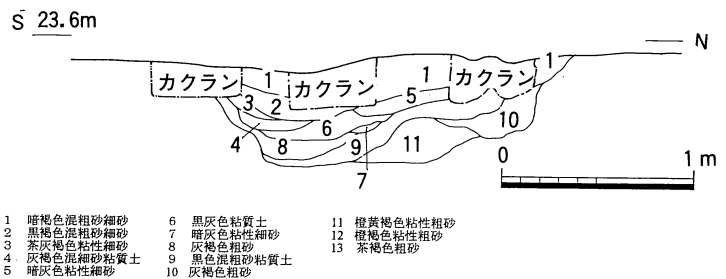
第57図 SD19出土遺物(1/4)

SR02 II区中央やや南寄りで検出した東西方向に流れる自然流路である。幅平均約2m、深さ平均約0.4mを測り、断面は浅い皿状で流路の中心がU字状に一段下がる。単独の流路に見えるが、II区-①で隣接するSD08・SD19に切られており、これらに先行するものであると想定できる。埋土は大きくみると上層が暗褐色系の粗砂混じり粘質土、下層が灰色形の細砂が堆積する。遺物は上層から下層



第58図 SR02出土遺物 (1/4)

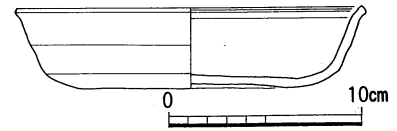
にかけて出土したが、特に流路底部で完形に近い形で出土するものが認められた。比較的底部でまともなものが認められたのはSB06に近い部分の流路底部で、須恵器杯身・杯蓋、土師器杯、高杯、黒色土器A類皿(第58図-7)などが出土している。これらの遺物から、流路の最終埋没は7世紀末から8世紀前半にかけてであると想定できる。



第59図 SR01土層断面図 (1/40)

SR01 I区-②北端で検出した東西方向に流れる自然流路である。西側は

I区-①から続いている。幅平均約4m、深さ平均約0.8mを測り、断面は上面がやや開くU字状を呈する。西側で若干分岐する部分を認めるが、主となる流域は概ね直線的に走る。この流路の埋土上層から下層にかけて、主として7世紀末から8世紀中頃の遺物が散在しているほか、わずかに弥生土器甕底部・石匙が出土している。特に、西側の底部付近で完形に近い土師器皿・甕・杯、須恵器杯身が比較的まとまって出土している。流路の最終埋没は概ね8世紀後半頃であると考えられる。



第60図 S R01出土遺物(1/4)

(3) 中世

S D32 II区-④中央やや北東よりで検出した南北方向の溝状遺構である。上面が削平されているほか、長さ自体も1.8m程度しか遺存していない。断面形は浅い皿状を呈し、深さ約5cmを測る。溝中央付近の底部から土師器杯(第62図-1)が2点並んで出土した。いずれも13世紀頃のものと考えられる。遺構面の上面の包含層とほぼ同じ土がこの溝の埋土となっており、この溝がある程度機能していた時期に続いて包含層が形成されたものと考えられる。

3. まとめ

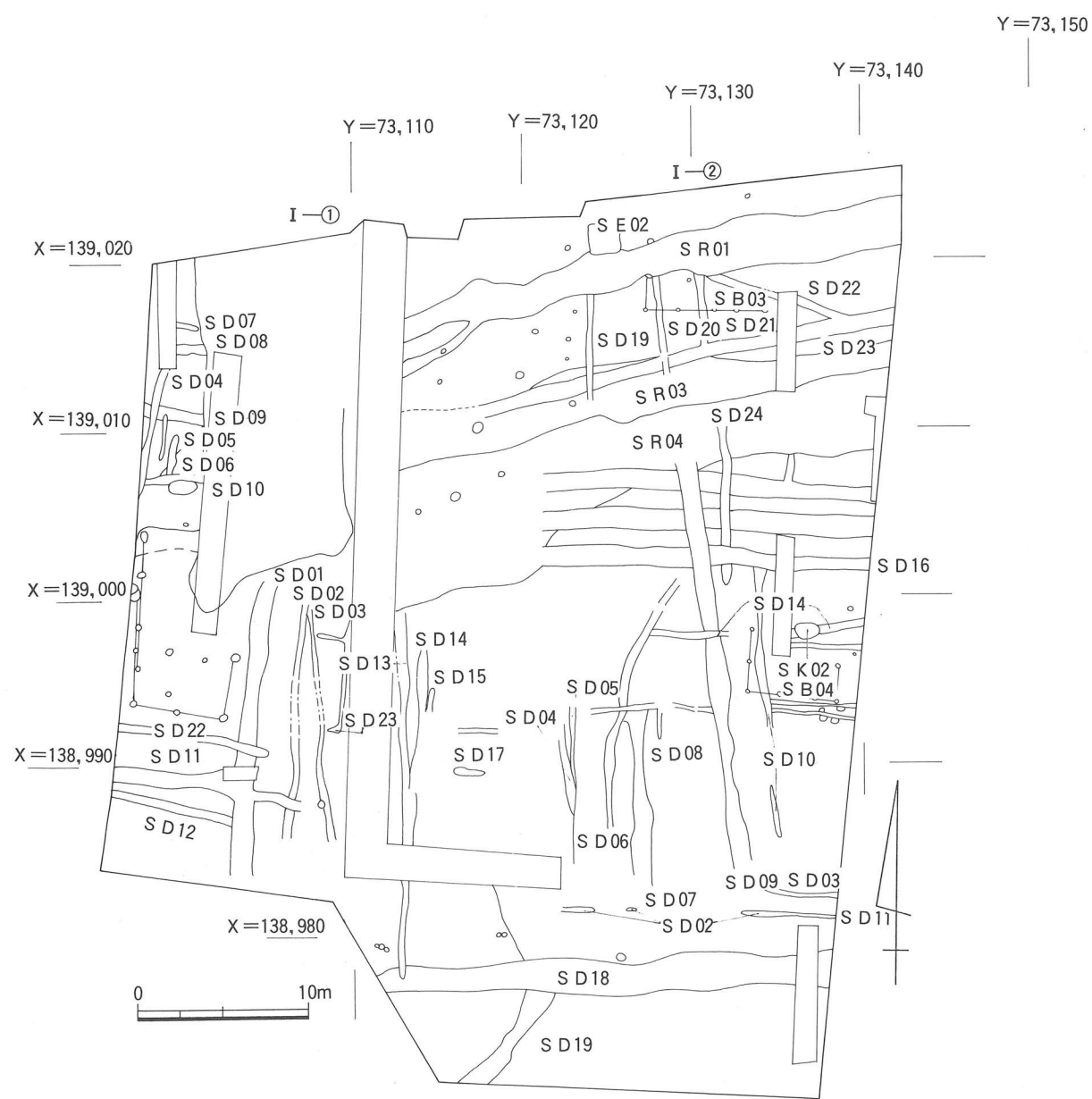
当遺跡で検出した遺構・遺物について概観してきたが、ここで確認事項をまとめておく。

まず遺構についてであるが、1月末の時点で掘立柱建物7棟、溝状遺構88条、井戸3基、ピット51基、土坑4基、池1基、自然流路4本を検出した。

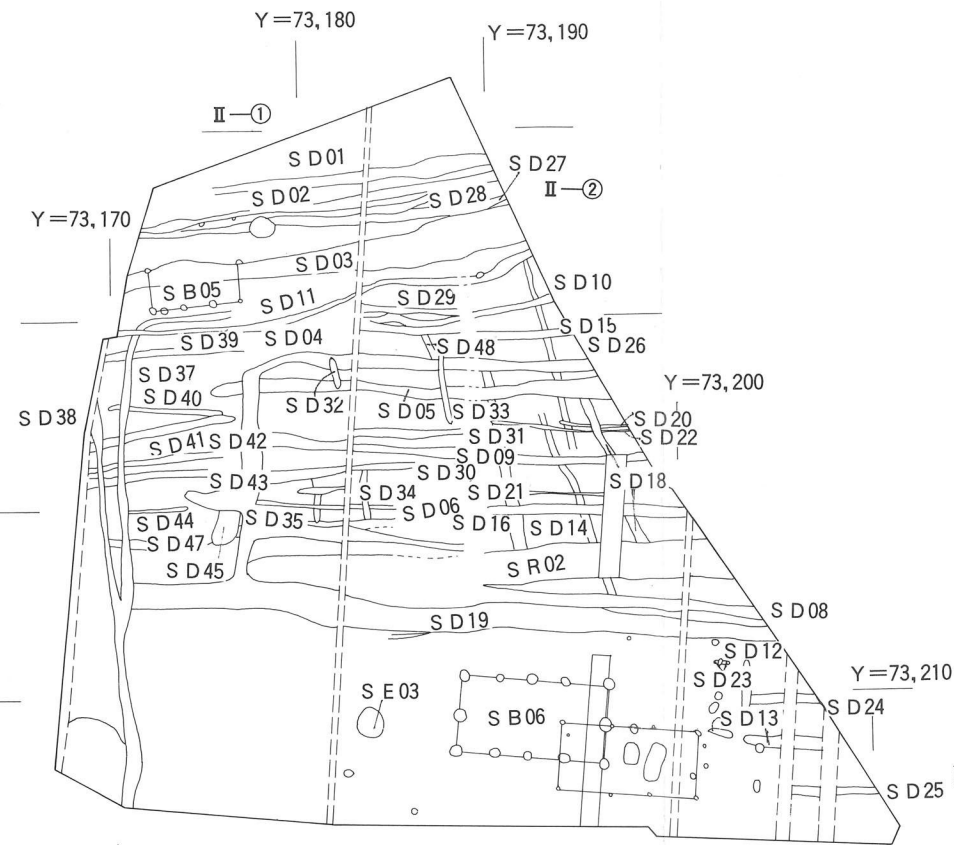
掘立柱建物は調査区西端で2棟(S B01・02)、中央付近で2棟(S B03・04)、東端で3棟(S B05・06・07)検出した。このまとまりは集落の単位を反映していない。主軸方位の単位で見てゆくと概ね4つの単位にわかれるようである。従って、近接して検出した建物に時期差が存在することが想定できる。この中で、N84°W前後の主軸方位をもつ一群が存在(S B04・06・07)し、極めて近接した時期の建物であることが想定できる。S B06・07ではわずかであるものの、7世紀末から8世紀前半の遺物が出土しており、当該期の建物であることが想定できる。溝状遺構は南北溝・東西溝をそれぞれ検出したが、東西溝が比較的多く認められる。それぞれの溝が並行する溝は比較的多く認められるが、直交する例はあまりなく、I区-①でS D01・22、S D23・24、II区でS D19・36が認められる程度である。また、これらの溝と掘立柱建物の主軸方位がそろうものも少なく、S B01とS D01・22およびS B06・07とS D19の関係がそれと分かる程度である。溝状遺構の大半から、7世紀末から8世紀前半までの遺物が埋土上層から下層にかけてめだって出土しており、それぞれの溝の時期も概ね近接しているものと想定できる。

これらの建物と溝状遺構は、建物とそれらを区画する区画溝の関係を持つと考えられるが、詳細は不明であり、今後の検討課題となる。

坪井遺跡の周辺では、既知の遺跡がほとんど存在せず、大内町西部での遺跡分布状況は希薄なものであった。今回の調査により、主として8世紀前半期の比較的まとまった遺跡が存在することが確認できたことは大きな成果であろう。



第61図 遺構配置図 (1/400)



第62図 包含層およびⅡ区SD32出土遺物(1/4)

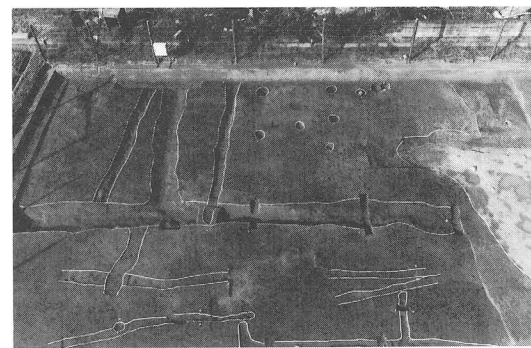
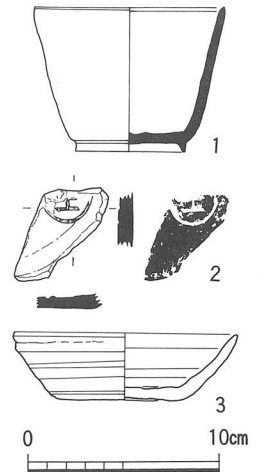


写真45 SB01周辺遠景 (東から)

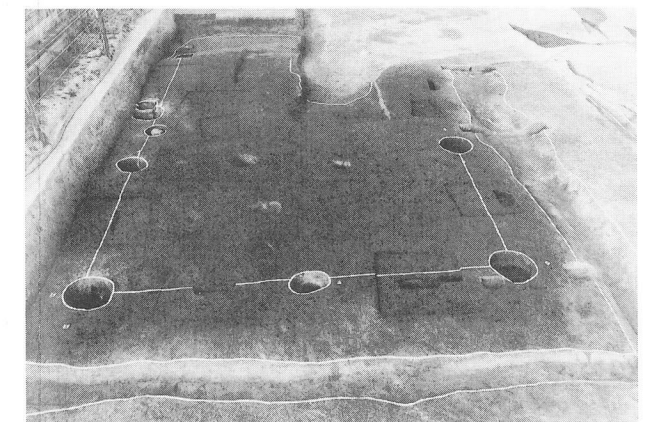


写真46 SB01・SD22近景 (南から)

金毘羅山遺跡

1. 立地と環境

金毘羅山遺跡は、大内平野南部の独立丘陵の金毘羅山東裾部に位置し、東には広範囲に河岸段丘を形成する与田川・吐川が北流する。当遺跡は、北山裾部の開墾時に弥生時代後期の土器が出土し、周知の遺跡となっている。今回調査した北隣接地は、圃場整備に伴い平成8年度に大川広域行政事務組合によって調査され、弥生後期から近世にかけての遺構が確認されている。また、当遺跡のすぐ南・東の低段丘面は、平成9年度の予備調査の結果、同河川による氾濫原であることが判明した。近年、周辺地域での発掘調査が進み、弥生時代から古代にかけての拠点集落である原間遺跡、古墳時代後期の集落である住屋遺跡、鎌倉時代の集落である西谷遺跡の存在が明らかとなっている。

2. 調査の成果

(1) 調査区の概要と旧地形の復元

I・II区は、金毘羅山及び南部の削平丘陵裾に位置する高段丘面で、III区は金毘羅山南東斜面中腹に位置する。I・II区は高段丘面に位置しながらも、近年まで何度も与田川の氾濫による洪水被害を受けたと聞き及んでいる。今回の調査では、ベース面を抉って洪水砂で埋まった弥生時代後期～近世末の自然河川SR01～04、それらの埋没した上面を広範囲の砂礫層で覆った鎌倉時代末頃のSR05を検出した。SR01は、幅16m余深さ2.5m以上を測り、調査区東部から北西方向に流れる。体部穿孔を施した甕を含む弥生時代後期後半の完形に近い土器を多く出土した。また流入品ではあるが、縄文時代早期に比定される完形の褐色滑石製玦状耳飾りも出土した。SR02は、幅18m以上深さ2.5m以上を測り、調査区東端部を北流する。最終埋没は近世末と考えられる。SR03は、幅6m深さ2.5mを測り、調査区南東部から北西部にかけて検出された。上下2層の洪水砂からなり、下層で6世紀末頃の須恵器を出土し、上層洪水砂は7世紀後半以降のものと考えられる。SR04は、SR01に切られ弥生時代後期にはベース面を形成しているが、弥生時代中期末と考えられるSH04を切る。平面プランの確定は困難であったが、北壁土層断面では幅9m余深さ1m以上を測り、北流する。

(2) 弥生時代前期～古墳時代前期の遺構

SK07・23, SP36, SH06等、縄文晩期～弥生時代前期初頭の突帯文土器を出土する遺構が散見する。

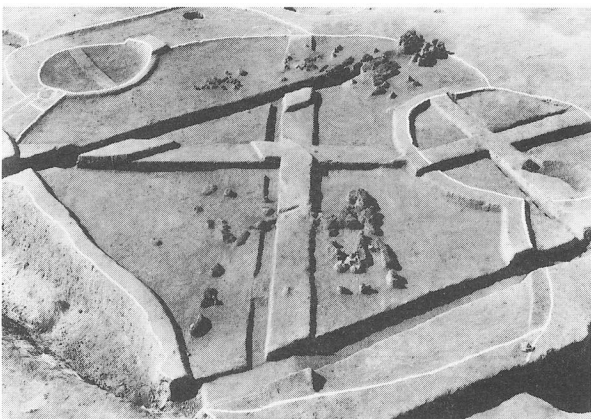


写真47 SH04焼失面検出状況（東から）

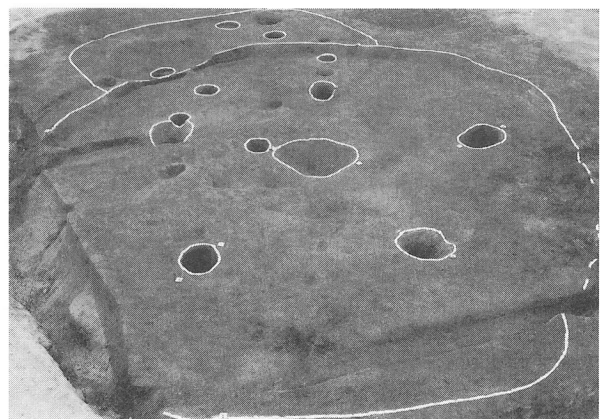


写真48 SH04完掘状況（東から）

S H06は摩滅した突帯文土器、サヌカイト剥片を出土した。5.0×5.5m程の隅丸方形を呈し、北東部に張出部を有するものと思われるが、後世の遺構によって切られており詳細は不明である。壁溝、炉跡等は検出されず堅穴住居ではない可能性も残る。弥生時代中期～後期の遺構として、溝2条、堅穴住居3棟、壺棺墓2基等が検出された。S D01・02は幅3m余、深さ1.0～1.5m程で、調査区南東部から北西方向にほぼ平行して検出された。中期のS D01は、波状文・円形浮文等を施した大型高杯他を出土し、金毘羅山裾で終わる。後期のS D02は、S R01の南西肩部を再掘削した基幹用水路と考えられ、調査区外に延びる。S H03は遺存状況が悪く、詳細は不明である。S H04は、直径7m余の円形を呈するものと思われ、北西部では壁溝が認められた。5本の支柱穴、中央に炉を有する構造であったと考えられる。焼失家屋で、北・東から中央に向かって焼け落ちた垂木材が検出された。後期の遺物も出土したが、床面遺物より中期末頃の焼失と考えられる。壺棺墓S T01は金毘羅山南東尾根中腹で、S T02はS D02西岸で検出され、ともに後期と考えられる。それぞれ単独に位置し、墓のあり方に検討を要する。

古墳時代前期の遺構として、堅穴住居1棟、土器廃棄土坑3基を検出した。金毘羅山裾に位置するS H05のプランはS H06を再利用したかのように重なるが、張出部を含めて東辺を30cm程狭めて掘削している。布留期の完形に近い甕1点、小型丸底壺2点他を出土した。薄い焼土層・炭層が検出されたが、明確な炉跡は認められなかった。一方、埋没を終えたS R01北東岸付近でS X02、S K01・21を検出した。S X02は5.5×4.0m以上、深さ20cm程の隅丸方形を呈し、布留期の二重口縁壺1点、小型丸底壺・高杯10点程他を出土した。S K01からはほぼ完形の甕1点、S K21からは小型丸底壺3点他を出土している。その他、S X01は突帯文土器を出土しているが、壁土層断面から古墳時代前期の遺構と考える。

(3) 古墳時代後期～飛鳥時代の遺構

I・II区境の微高地から埋没後のS D02上にかけてS H02が検出された。5.5m四方の隅丸方形を呈し、深さ30cm程遺存していた。北辺部中央に竈、周囲に壁溝を配し、4本の支柱穴を有する構造と考えられる。竈の遺存状況は良好で、煙出しピットとの1m程間を断面30×17cmの隅丸形状にトンネルを掘って煙道を構築した状況が観察された。南辺中央部に配された土坑から炭化木材・須恵器杯身2点、埋

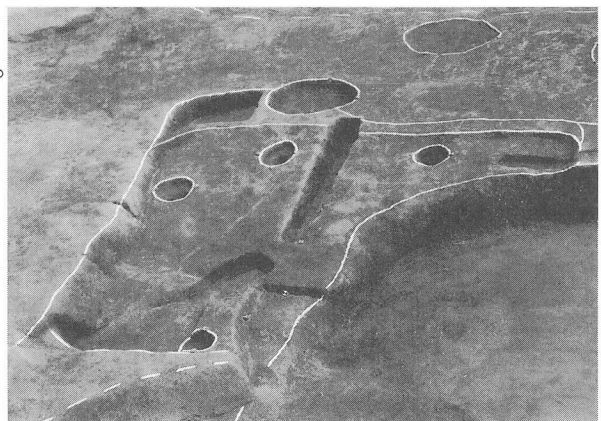


写真49 S H05完掘状況（西から）

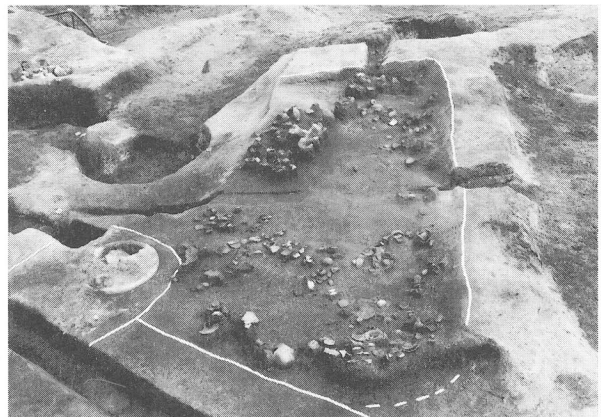
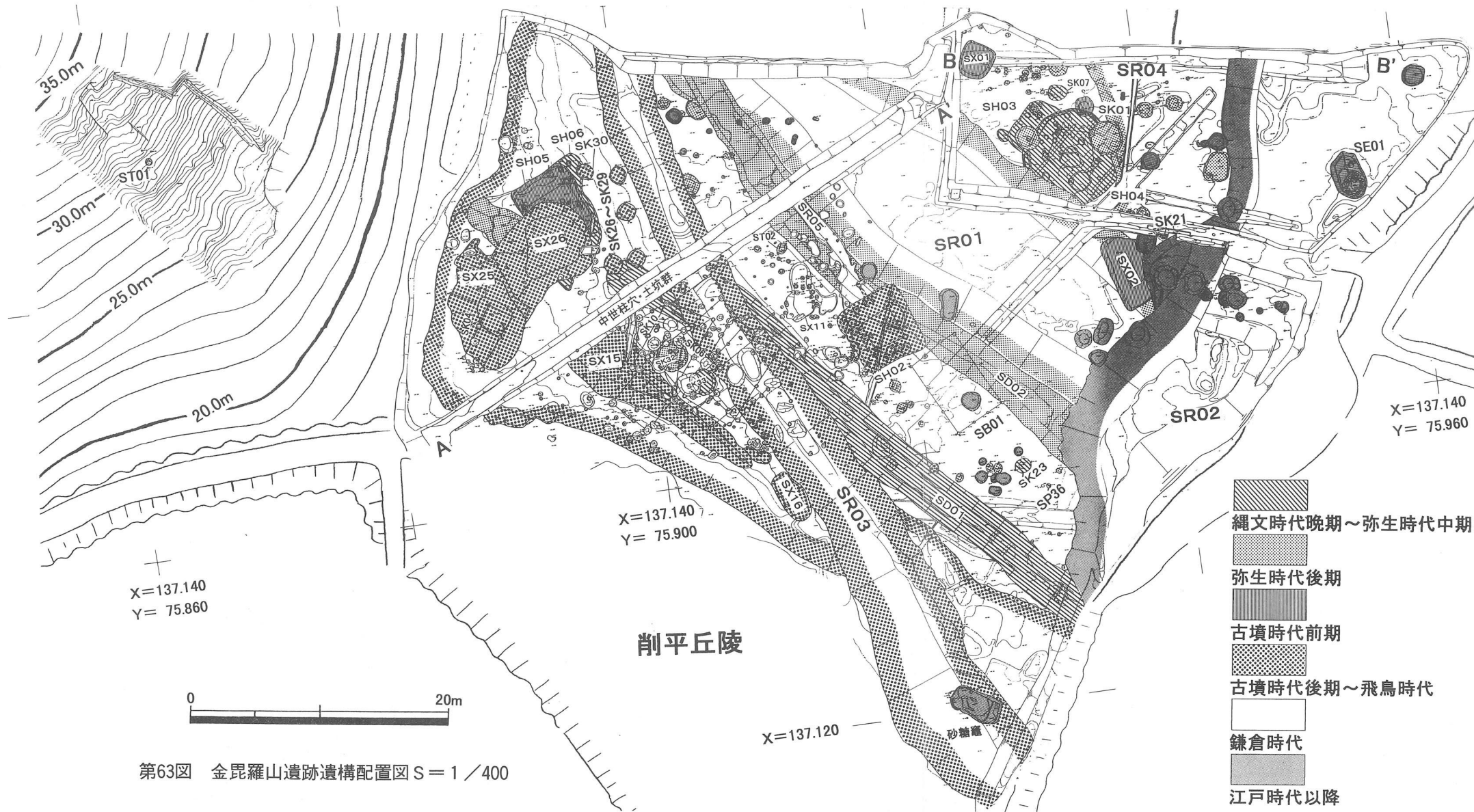


写真50 S X02遺物出土状況（北から）



写真51 S H02完掘状況（南から）



第63図 金毘羅山遺跡遺構配置図 S = 1 / 400



写真52 II・III区航測時遠景(南から)

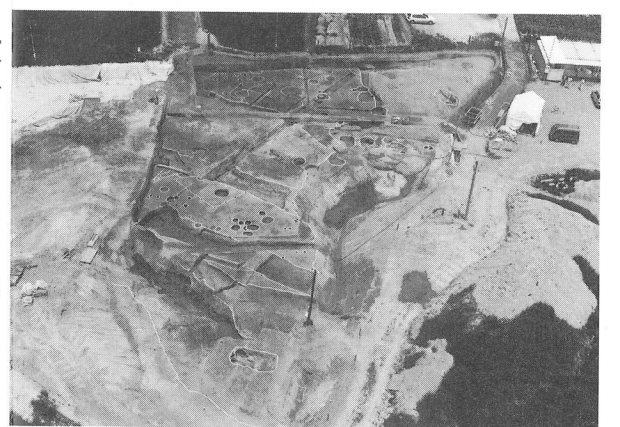
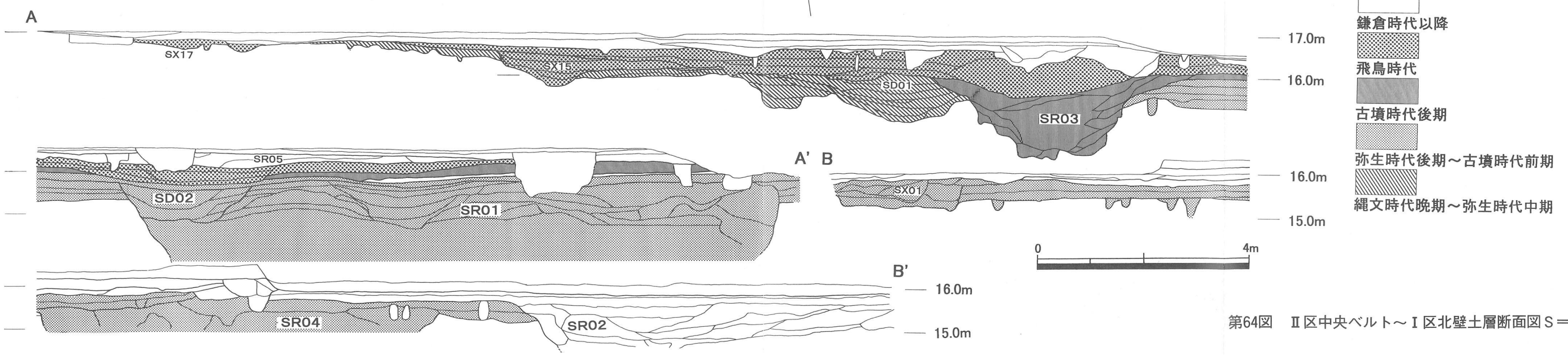


写真53 I区航測時全景(南から)



第64図 II区中央ベルト～I区北壁土層断面図 S = 1 / 80

土中から須恵器有蓋高杯2点他が出土し、6世紀前半頃に比定される。S B01がほぼ同様の埋土を呈し、S R03に平行してすぐ南に位置するが、時期を特定できる遺物が見られず、接近しすぎていることもあり、同時併存の可能性は低い。周囲に同時期の遺構は検出されなかった。

金毘羅山と南東の削平丘陵裾部で、7世紀後半頃に比定される不定形の落ち込みを検出した。幼児頭大の礫を多く含む暗褐灰色混粗砂粘質土のS X16と粗砂の流入後に褐茶色系粘質土が堆積したS X25・26からは須恵器杯・高台付杯の他、土師器甑把手等を出土した。S X25・26の最深部は1 m以上上がり、湧水が激しい。井戸枠等の痕跡は認められず、ため池状の機能を持った遺構と思われる。S K26～30は径1.3 m程の土坑で、S K30からは須恵器片を出土した。S X26を取り巻くように位置し、同時期と考えられる。淡茶～灰黒色粘質土の埋土を有するS X15の最深部は溝状のプランを呈する。弥生時代中期の遺物も多く出土したが、下層からも須恵器が出土し、S X16・25と同時期と考えられる。周囲に同時期の住居跡は検出されず、弥生時代中期に加え、飛鳥時代の集落の拠点とは調査区南東近辺にあったものと思われる。

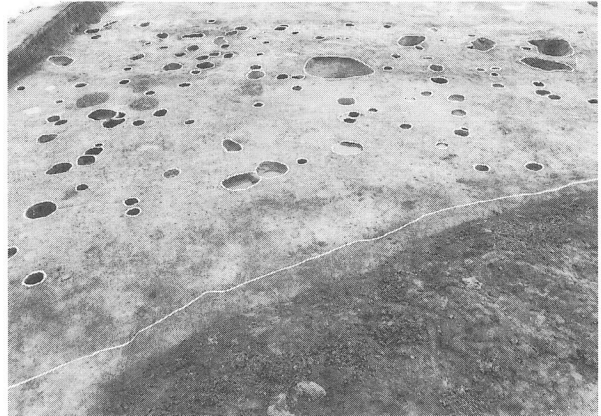


写真54 中世柱穴・土坑群完掘状況（南西から）

(4) 中世～近世の遺構

S R03等が埋没した後の削平丘陵北部の平坦面で13世紀後半～14世紀代に比定される柱穴・土坑群が検出された。300個程の柱穴群の配置状況から、8棟程の掘立柱建物を復元した。同時併存は2棟程と考えられ、主軸方位は概ねN-37°～56°-Eを測り、雨落ち溝を有する1棟のみN-15°-Eを測る。S K04から「元豊通宝」（北宋銭1078年）、S K10から「政和通宝」（北宋銭1111年）各1枚が出土した。また、S K06からは1個体を破碎して廃棄した状況で備前焼大甕片が、S X11からは完形に近い土師器杯・小皿各10点以上が東播系須恵器捏鉢、和泉産瓦器碗、青磁碗片とともに出土した。S X11を含め、多くの土坑、柱穴に焼土塊・炭の混入が見られ、鉄滓を出土するものもあり、当地で小鍛冶を行っていた可能性が考えられる。



写真55 S X11遺物出土状況（東から）

調査区東北部で18世紀後半頃に比定される土坑群及び石組み井戸S E01を検出した。また南東部で検出された砂糖竈は横2連式の竈を持つ半地下式の構造物である。竈連結部奥壁に煙突につながる穴が穿かれていた。幕末から明治時代にかけて使用されていたものと考えられる。

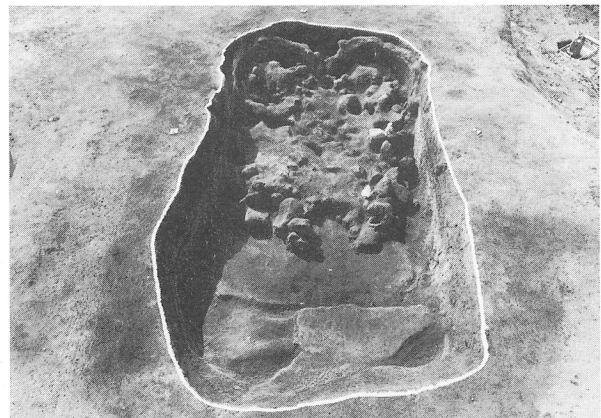


写真56 砂糖竈壁・焼土出土状況（東から）

塔の山南遺跡

1. 立地と環境

塔の山南遺跡は、香川県東部の大内町に広がる小平野の南西端、同町川東杖の端32-1番地外に所在する。阿讃山脈の支脈である矢筈山系・虎丸山から北東に延びる尾根上末端近く、標高は30~43mの付近に立地する。

本遺跡は、路線内における一頂上部より北へ延びる尾根と東へ延びる尾根をもち、三方に眺望がきく立地条件を備えている。

本遺跡の周辺には、縄文時代以前の遺跡は今のところ確認されていないが、与田川上流域で石鏃・石斧・磨石等が採集され、水主神社などで所蔵されていることから、同時代の未周知の遺跡が点在する可能性が高い。

弥生時代では、中期の水主神社遺跡、後期としては飛谷遺跡・別所遺跡が周知の遺跡とされる。また、近年下屋敷遺跡が、圃場整備事業に伴い小規模ながら発掘調査されている。

古墳時代の遺跡としては、近隣には前期の前方後円墳である大日山古墳の他、後期の原間1号墳等が所在する。



第65図 遺跡位置図

2. 調査の成果

本遺跡では、昨年度に実施した予備調査において存在を確認していた石蓋土壙墓1基をはじめ、本調査で新たに隣接して箱式石棺墓1基、他に土壙墓4基、不定形土坑等を検出した。

石蓋土壙墓は、北へ延びる尾根の緩傾斜から急傾斜に変わる付近の、標高がおよそ41.4mの地点に所在する。規模は全長2.82m、幅0.9m、深さ0.76mを測る。主軸は尾根に直交して概ね東西にとる。風化の進行した花崗岩製の蓋石7枚の隙間を径15~20cm程度の塊石で充填している。蓋石は西端のものが最大で長さ75cm、幅40cmを測る。東端の石は長さ50cm、幅20cmとかなり小ぶりであることから、頭は西向きであったことが推察される。副葬品等の出土遺物は確認できなかった。

箱式石棺墓は、前記の石蓋土壙墓の北側約0.9mの、標高41.2mの地点で検出した。石蓋土壙墓よりやや規模が小さく、掘り形の全長は2.01m、幅0.75m、深さ0.5m、棺の内法は長さ1.53m、幅は西端で0.3m、東端ではやや狭く0.2mを測ることから、頭は西向きであったことが窺える。深さは0.34mを測る。石棺を構成する石材は蓋石、側石全て風化



写真57 表土除去後全景 (南東から)

の進行した花崗岩の板石である。5枚の蓋石の間は拳大以下の花崗岩風化礫を充填している。側石は蓋石の重さによるものか、一部内傾している。精査中であり、副葬品等は未確認である。

土壙墓は4基検出した。いずれも前述の石蓋土壙墓、箱式石棺墓と同じ尾根のやや上方で、標高42.5～42.9mの緩勾配の地点に、主軸を東西にとって立地する。

土壙墓1～3は、ほぼ等間隔に主軸を東西にとって並ぶ。掘り形の規模・形状も近似しており、土壙墓1は、長さ2.95m、幅1.1m、深さ0.63m、土壙墓2は、長さ2.8m、幅1.1m、深さ0.63m、土壙墓3は、長さ3m、幅0.9m、深さ0.35mを測る。横断面形は概ね途中に段をもち、底部は丸みをもつ。

土壙墓4は、以上の3基とはやや離れて石蓋土壙墓との中間の位置に所在する。長さ2.75m、幅0.7m、深さ0.33mとやや規模が小さく、掘り形断面も壁面は垂直に近く、底面は平坦である。西寄りの底面3方隅に木棺の側板を立てたと思われる浅い溝の痕跡を検出したことから箱式木棺であった可能性をもつ。

土壙墓4基とも、遺物は皆無である。

3. まとめ

これら6基の土壙墓及び箱式石棺墓は、一尾根のある部分に集中して立地している。各遺構はいずれも概ね主軸を東西にとると記したが、尾根は土壙墓1～3付近ではほぼ北を向いて下り、土壙墓4、石蓋土壙墓、箱式石棺墓の立地するあたりはわずかに北北西に屈曲する。このことから、一連の墓からは主軸を東西にとるというよりも、尾根に対して直交させて墓壙を構築するという被葬者集団の埋葬法についての慣習的考え方を窺い知ることができる。

但し、遺構周辺の表土層除去作業を含めても出土遺物は皆無に近く、これらの遺構の構築時期について明らかにすることができないが、その立地のあり方などから、弥生時代後期以降の所産であろうと推察する。

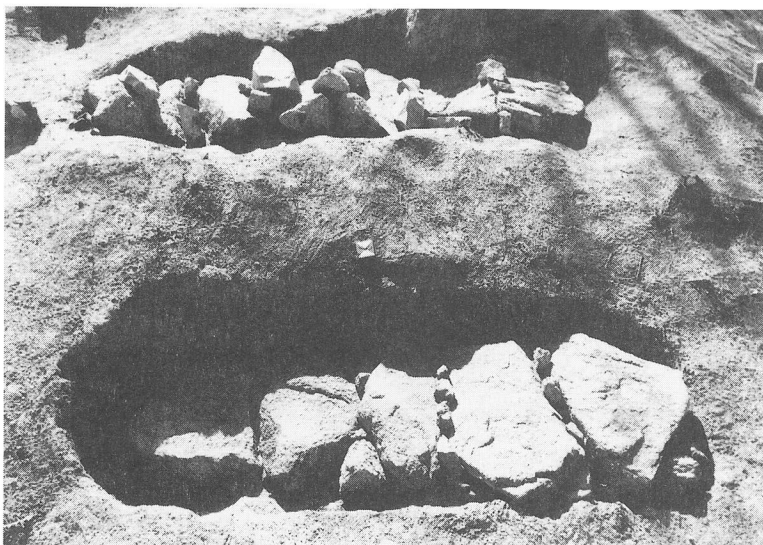


写真58 石蓋土壙墓(奥)・箱式石棺墓(手前)検出状況(北から)

原 間 遺 跡

1. 立地と環境

原間遺跡は香川県東部の大内町に広がる平野の南部，大川郡大内町川東原間1356番地外に所在する。調査区はちょうど阿讃山脈の分脈である矢筈山系の虎丸山山塊から延びる丘陵に挟まれた僅かな平野部とその丘陵部に位置する（第66図）。

地形的にみると原間地区の平野は，大内町に広がる平野の一部と考えられ，また現在の行政区分でも大内町に属している。現在この平野部中央には古川が蛇行しながらもほぼ南北に流路を取り，大内町三本松で与田川に合流する。しかし昨年度の調査の結果，この谷筋部分に源を発し，狭い平野部を流れる古川は中世以前にちょうどⅡ区とⅣ区の間を抜け，現在の原間池に延びていることを確認した。また，この原間池は高松藩初代藩主松平頼重が讃岐に入封した4年目の正保二年（1645）に周辺に点在していた池を改築し，現在に至っていると考えられていることや明治12年までは白鳥町に属していたことから古川が湊川水系に含まれていたと考えられ，今後水系ごとの集落あるいは首長墓の有り方を考えるにあたり重要な資料となるものと考えられる。



写真59 原間遺跡遠景（北から）

原間地区周辺には弥生時代の幸代池西遺跡，古墳時代前期の大日山古墳，後期の原間1号墳，2号墳，古代の高松廃寺が確認されており，また原間池周辺が古代の南海道の推定地とされている。

弥生時代の幸代池西遺跡は原間地区の香田池の西側に突き出した微高地上に立地している。昭和4年に畑を開墾中に弥生時代の高坏・緑泥片岩製磨製蛤刃石斧・同柱状片刃石斧が出土している。

古墳時代では大日山古墳，原間1・2号墳が確認されている。大日山古墳は秋葉神社が位置する丘陵頂部から南西に下った丘陵部に位置し，全長38mの前方後円墳である。前方後円墳としては香川県で最も東に位置し，この地域の当時の有力豪族の墓と考えられている。

原間1号墳は虎丸山から北に派生する丘陵の南斜面に位置する古墳である。原間地区では最奥部にあり，東は調査区Ⅳ区のある東の丘陵によって閉ざされ，立地条件としては恵まれていない。石室構造は横穴式石室で，左側の袖石が突出し，南東方向に開口する。規模は玄室長3.8m，奥壁幅2.1m，玄室高約2.46mを計る。羨道部一部が破壊されている。奥壁は巨大な一枚石で，側壁は0.5～1.0mの花崗岩で構築されている。

原間2号墳は今年度の発掘調査区に位置するため後述する。

古代では高松廃寺がある。現存するのは花崗岩製の礎石が1点あるのみであるが，白鳳期の瓦と平安時代の瓦片が採集されている。



- | | | | |
|---------------|---------------|----------------|----------------|
| 1. 大日山古墳 | 5. 原間4号墳 (仮称) | 9. 原間10号墳 (仮称) | 13. 樋端1号墳 (仮称) |
| 2. 高松廃寺 | 6. 原間7号墳 (仮称) | 10. 原間2号墳 | 14. 樋端2号墳 (仮称) |
| 3. 原間1号墳 | 7. 原間8号墳 (仮称) | 11. 原間5号墳 (仮称) | 15. 神越2号墳 |
| 4. 原間3号墳 (仮称) | 8. 原間9号墳 (仮称) | 12. 原間6号墳 (仮称) | 16. 神越桃山古墳 |

第66図 周辺遺跡及び調査区配置図

2. 調査の成果

原間遺跡の本格的な発掘調査は平成9年度から開始し、今年度で2年目となる。昨年度は平野部（Ⅰ～Ⅳ区）を中心に発掘調査を実施し、今年度は丘陵部（Ⅷ～Ⅺ区）を中心に2班体制で、まず1班がⅧ区の調査を実施し、もう1班は原間遺跡東の丘陵（Ⅸ区）の予備調査から開始した。この予備調査の結果を基に本調査対象面積を24,243㎡とした。

平成9年度は原間遺跡の平野部を中心に発掘調査を実施し、弥生時代後期から近世にかけての集落跡を検出した。中心は弥生時代後期と古代の遺構である。弥生時代後期では、Ⅰ～Ⅳ区を中心に円形・方形の竪穴住居跡20棟、掘立柱建物跡2棟、土坑、土器棺墓などを検出した。特に集落の北限と考えられる溝からは多量の弥生土器とともに竪杵・鋤などの木製品や銅鐸形土製品などの遺物が出土している。また、古代の遺構は平野部中央では検出しておらず、東の丘陵裾部Ⅱ・Ⅲ区でのみ検出した。検出した遺構は竪穴住居跡3棟、掘立柱建物跡5棟、土坑などで、時期は7世紀を中心としている。特に掘立柱建物では建物主軸をほぼ真北に持つ大型のものを検出し、これらは「L」字に配置する。

今年度はⅧ区～Ⅺ区で、平野部のⅧ・Ⅹ区、丘陵部のⅨ・Ⅺ区が調査対象地区となる。

Ⅷ・Ⅹ区の平野部では昨年度に引き続き弥生時代後期及び古代・近世の遺構を検出した。特に近世の砂糖醸造用カマド遺構は「讃岐三白」と呼ばれ、讃岐の特産品である「砂糖」の生産が東讃を中心として盛んであったことを裏付けるものである。また、Ⅸ・Ⅺ区の丘陵部では大内町以東の古墳時代の墓制、特に古墳時代前期の大日山古墳から6世紀末頃の原間古墳の間を埋める資料である5～6世紀の古墳を8基検出した。検出した古墳は全て10～15mの小規模な円墳で、墓壇主体部も粘土槨木棺墓、木棺墓、箱式石棺墓と多様あることが解った。

ここではⅨ区（東丘陵）とⅪ区（西丘陵）で検出した古墳を中心に報告する。

(1) Ⅸ区（東丘陵）の概要

Ⅸ区とした東丘陵は原間遺跡の東にあり、虎丸山から北方向に延びる丘陵上にある。丘陵頂部にはやや高低差があり、調査区南部で一旦途切れるようになるが虎丸山から延びる一連の丘陵部で、ここからは大内町内及び白鳥町内が一望できる。この丘陵部の先端部に周知の古墳である原間2号墳があり、また発掘調査の結果それぞれの頂部には5号墳・6号墳を確認した。また、竪穴住居跡も2棟検出した。竪穴住居の時期は弥生時代後期と思われる、平野部で検出した竪穴住居群と同時期であることから両者との関連が今後の検討課題である。

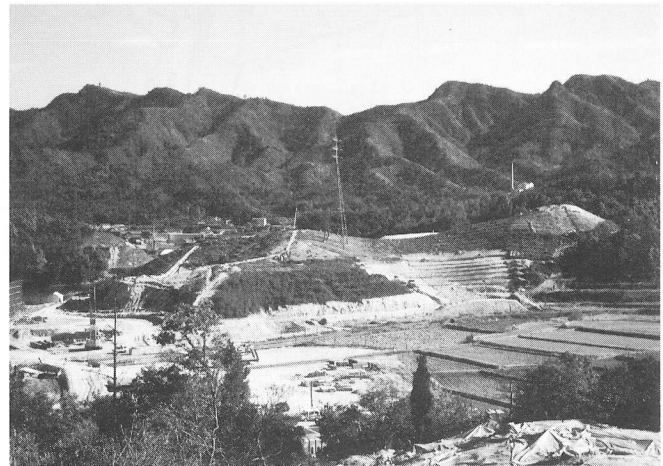


写真60 東丘陵遠景（西から）

原間2号墳

(1) 調査前の状況

2号墳は、虎丸山から北に鋸歯状に延びる尾根の先端部、標高約30mのところに位置する。1号墳と比べて眺望に優れ、古墳からは、東は湊川下流域の白鳥町に広がる平野を一望でき、遠くに瀬戸内海を

望むことができる。西に目を移せば、原間の谷筋から与田川下流域の大内町に広がる平野を一望できる。調査前古墳周辺は、近世頃に畑地として開墾され階段状に平坦面がつくられていたが、現在は雑木林になっている。また、北側は工場用地として削られ、崖になっていた。古墳の痕跡としては、石室の石材と思われる花崗岩3石（内1石は倒れている）が確認できるのみで、その他に古墳らしい痕跡は見あたらなかった。

(2) 墳丘

調査前は、墳丘は周囲の畑地化にともなって削られ、平坦化され、その大部分は失われていると考えられた。表土を掘削すると墳丘の北側は削られ原形をとどめていなかったが、その他の部分において裾部は残っていた。さらに、古墳の南側から西側にかけて尾根を切るように周濠を検出した。墳丘の規模は、直径約15m程度の円墳で、墳高は上部をかなり削平されているため不明であるが、1号墳と比べて一回り大きいものであったと推定できる。墳丘は花崗岩の地山を整形し、その上に版築による盛土がなされていたと考えられる。版築は、確認できた範囲では、石室構築と並行して行われ、黄褐色土と黒灰色土が交互に叩きしめられていた。

(3) 埋葬施設

墳丘のほぼ中央に横穴式石室が築造されていた。羨道部は、石室の石材がほとんど抜き取られており、玄門も北側の袖石が倒された状態で見つかった。玄室も基底石が残されていただけであった。石室はほぼ東西に主軸方向をとり、東に開口していた。平面プランは、石材抜き取り跡から想定すると、北側袖石が出ている片袖式石室であったと思われる。これは、左右の違いはあるが、1号墳と同じである。

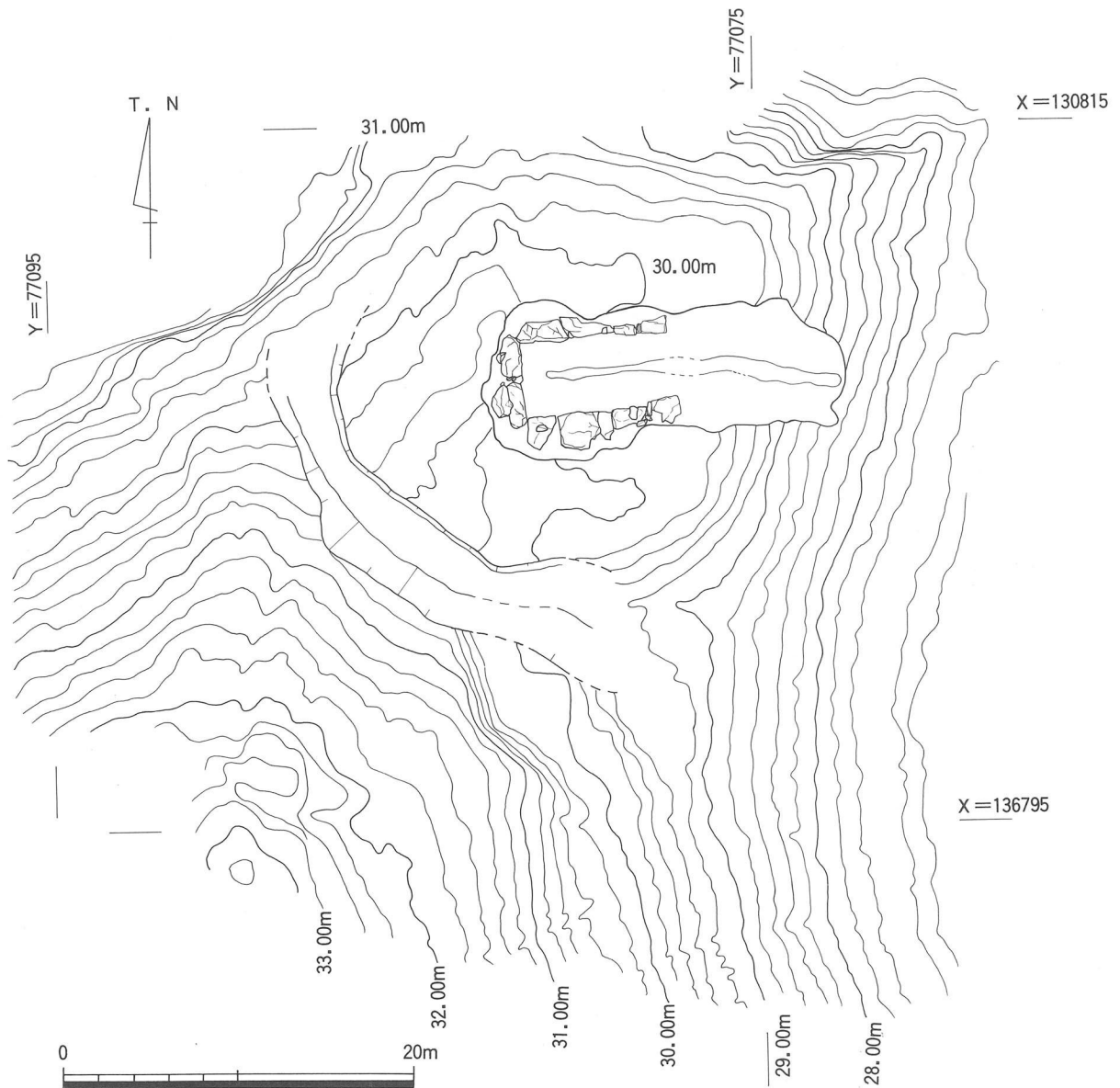
石室の規模は、玄室長4.16m、玄室奥壁幅2.21m、中央幅2.21m、玄門付近幅1.79mを測る。石室の石材は、かなり大きめの花崗岩が用いられ、その間を埋めたり、安定させるために下に置く石材として人頭大から拳大程度の砂岩（河原石）が使用されていた。玄室側壁の北側石列はほぼ真っ直ぐに並んで配置されている。しかし、南側石列は中央部までは北側石列と同様にほぼまっすくに並んで配置されているが、そこから玄門部に近づくほど内彎し、奥壁部に比べて玄門部で約40cm内側に寄るように配置されていた。また、両側石列とも、その度合に差異はあるが、奥壁際ではほぼ垂直に面がつくられており、玄門部ほど面が上にいくほど内側に傾くようにつくられていた。奥壁は1枚の大きな石材が使用されておらず、ほぼ中央部で2つに分けて積み重ねられていた。奥壁の造りや河原石が使われていることを除いて、石室の規模や石材の使い方も1号墳とよく似ている。

玄室床面は、粘質土と5mm程度の花崗岩の小礫を混ぜたものを貼り、叩き締めてつくられていたようで、円礫等による敷石は検出できなかった。床面には、奥壁から約0.7mのところから羨道部にかけて石室床面のほぼ中央部に排水溝を検出した。

墓壙は、東側に傾斜する斜面に、東に開口する横穴式石室が造られているため、西の奥壁側は地山が約0.8m程掘りこまれているが、東側は深さを持たず、断面がL字形になる。墓道については、検出できなかった。

(4) 出土遺物

羨道部で須恵器杯蓋がほぼ完形で1点出土した以外は、須恵器片・土師器片が玄室各所で床面近くに散乱して出土するとともに、墓壙（石室）埋土の各層位で出土した。原位置を保つものはなく、攪乱されていた。また、後期古墳に特有の玉類・耳環といった装身具類や武具・馬具のような鉄製品の出土は確認できなかった。



第67図 原間2号墳丘測量図

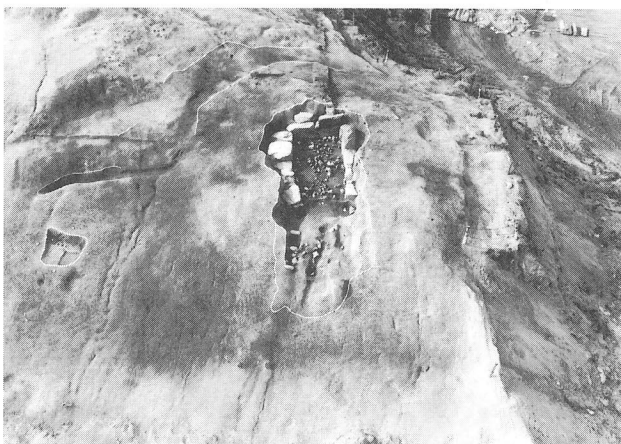
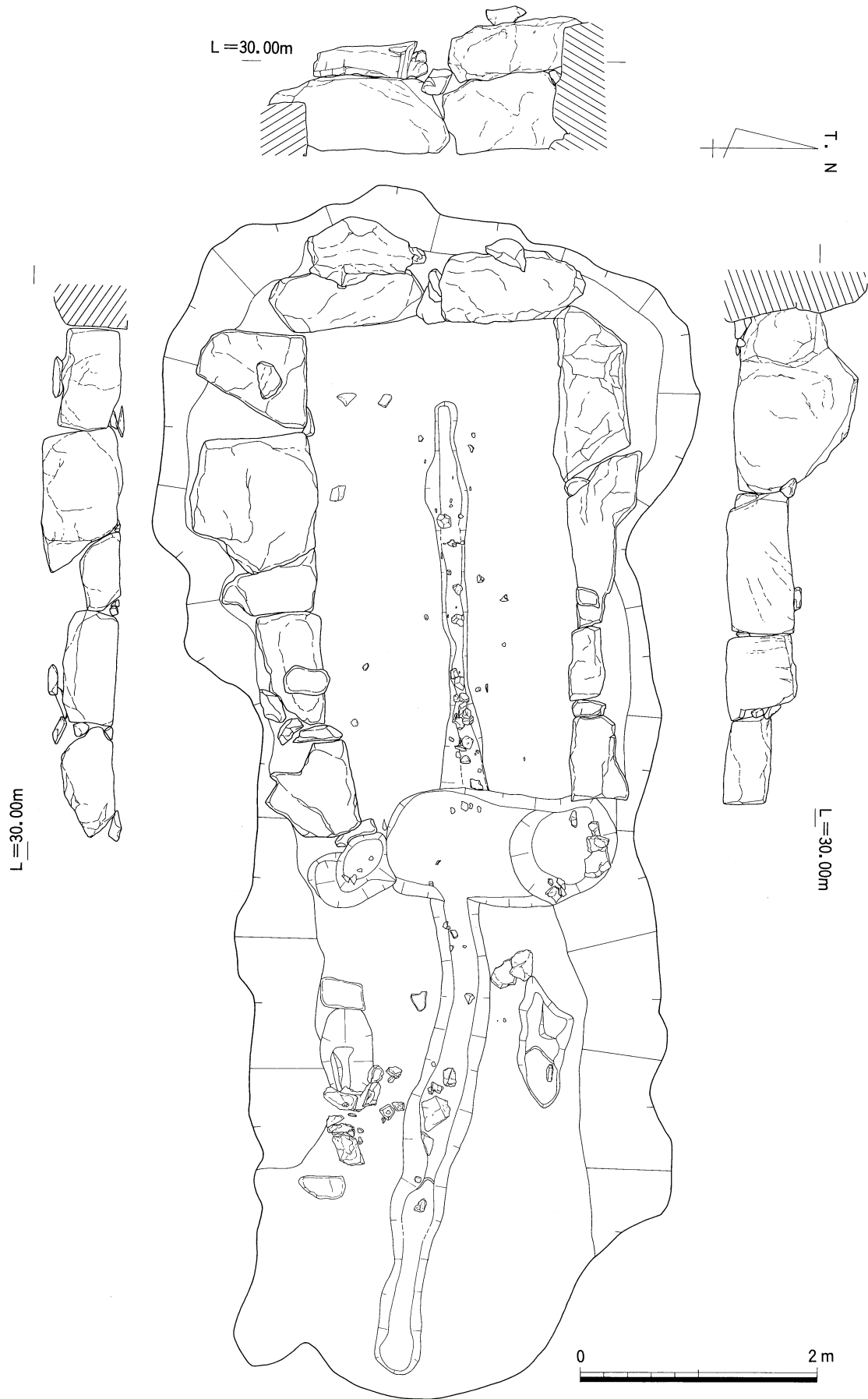


写真61 原間2号墳検出状況（東から）



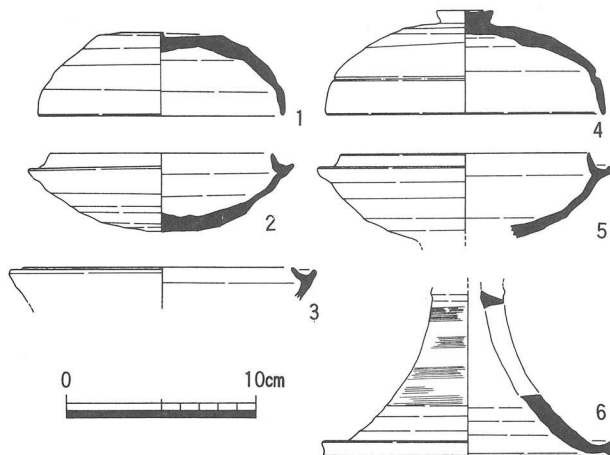
写真62 原間2号墳遺物出土状況（東から）



第68図 原間2号墳石室実測図

玄室床面近くで出土した須恵器片の内、接合ができ、図化可能なものについて第69図に実測図を掲載した。

1は羨道部中央付近で唯一ほぼ完形で出土した須恵器杯蓋で、TK209型式併行期のものとみられる。全体的にやや歪にゆがんでいるが、口径12.8cm、器高4.3cmを計る。外面には、自然釉の付着がみられ、上面から3分の2程度までへら削りされている。2は玄室奥でいくつかに分かれて出土し、口縁部の2ヶ所を除いて接合できた杯身である。口径11.2cm、器高4.2cmを計る。立ち上がり



第69図 原間2号墳出土遺物実測図

は薄く仕上げられ、底面から器高の3分の1程度までへら削りがなされている。3は玄門部近くで出土した口縁部が6分の1程度残っていた須恵器有蓋高杯かあるいは杯身で、推定口径14.2cmを測る。立ち上がりは小さく、受け部と同じかやや高い程度である。4は玄室中央部でいくつかに分かれて出土し、ほんの1部を除いて接合ができた有蓋高杯の蓋である。口径14.5cm、器高4.8cmを計る。つまみを持ち、上部の5分の1程度までへら削りがなされ、肩に1条の沈線が巡らされている。5は玄室奥部でいくつかに分かれて出土し、全体の5分の1程度接合できた有蓋高杯の杯部である。推定口径13.1cmで、立ち上がりは薄く仕上げられている。6は玄室中央部でいくつかに分かれて出土し、脚部のみ半分程度接合できた須恵器長脚2段2方透かし高坏の脚部である。推定底部径15.1cmで、外面には刷毛目が施されている。

出土した須恵器からみると、2号墳は1号墳と同様に6世紀末から7世紀初頭に築造されたと考えられる。追葬が行われたかどうかについては、現在のところ十分に出土している土器を検査していないので不明である。今後のくわしい出土土器の分析を待ちたい。

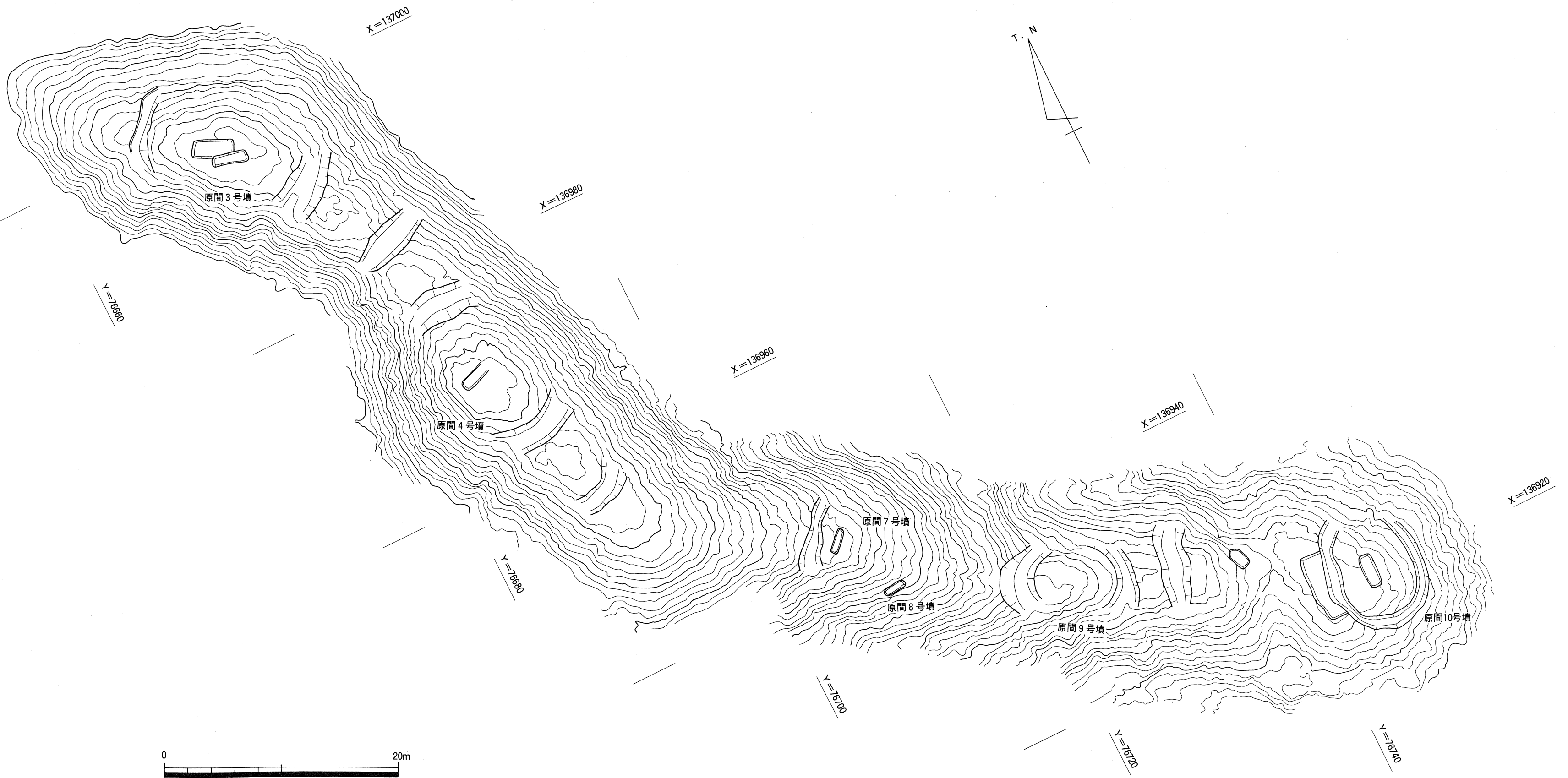
また、墓壙（石室）埋土中からは、平安時代、鎌倉時代、江戸時代の各時代の土器片が出土している。このことから、古墳の石室の開口時期は非常に古く、石室が何らかの形で利用されていたことがうかがえる。

(2) XI区（西丘陵）の概要

XI区とした西丘陵は平野部を挟み東丘陵の反対側に位置するもので、虎丸山から北方向に延びる尾根が調査区ほぼ中央部で北西方向と東方向に分岐する。その分岐した部分が調査区内で最高所にあたり、原間4号墳が位置し、南側周溝からさらに約4m間隔をあけて濠が掘削されている。北西方向に延びる尾根には原間3号墳を検出し、この原間3号墳と4号墳の周濠間の鞍部には両古墳を画するように尾根と直行する濠が掘削されている。一



写真63 西丘陵遠景（東から）



第70図 原間遺跡Ⅱ区(西丘陵)地形測量図

方東方向に延びる尾根には高所から7・8・9・10号墳を検出している。また、9号墳は周濠のみの検出で、主体部は確認できなかった。周濠から5世紀末頃の須恵器坏身・蓋が出土しており、また、東側周濠から約2mの間隔をあけて尾根に直行する濠が掘削されている。

原間3号墳

(1) 調査前の状況

原間3号墳は西丘陵Ⅺ区の北方に伸びる尾根上のピークからやや北寄りに下った部分、標高約53mに位置する。平成9年度に尾根筋に沿って掘削した予備調査トレンチによって、周濠と粘土槨の埋葬施設をもつ古墳であることが報告されている。現状での墳丘等は確認できなかった。

(2) 墳丘

遺構は、埋葬施設である土壙2基と周濠を検出した。ただし周濠は東西の谷に位置する部分が、流出していたため、完全な形では残っていなかった。そのため東西の墳裾は確認できなかったが、南北に残

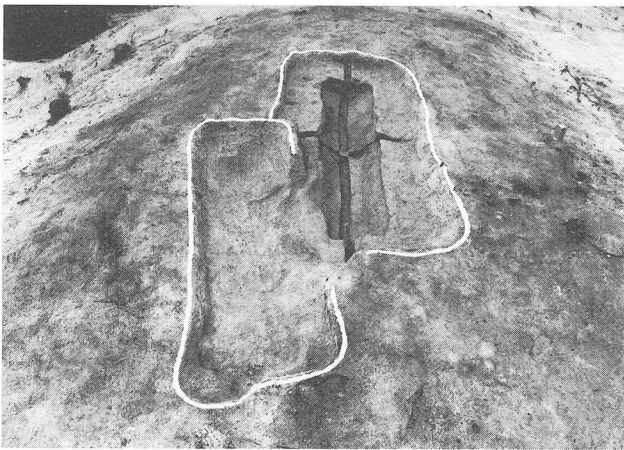
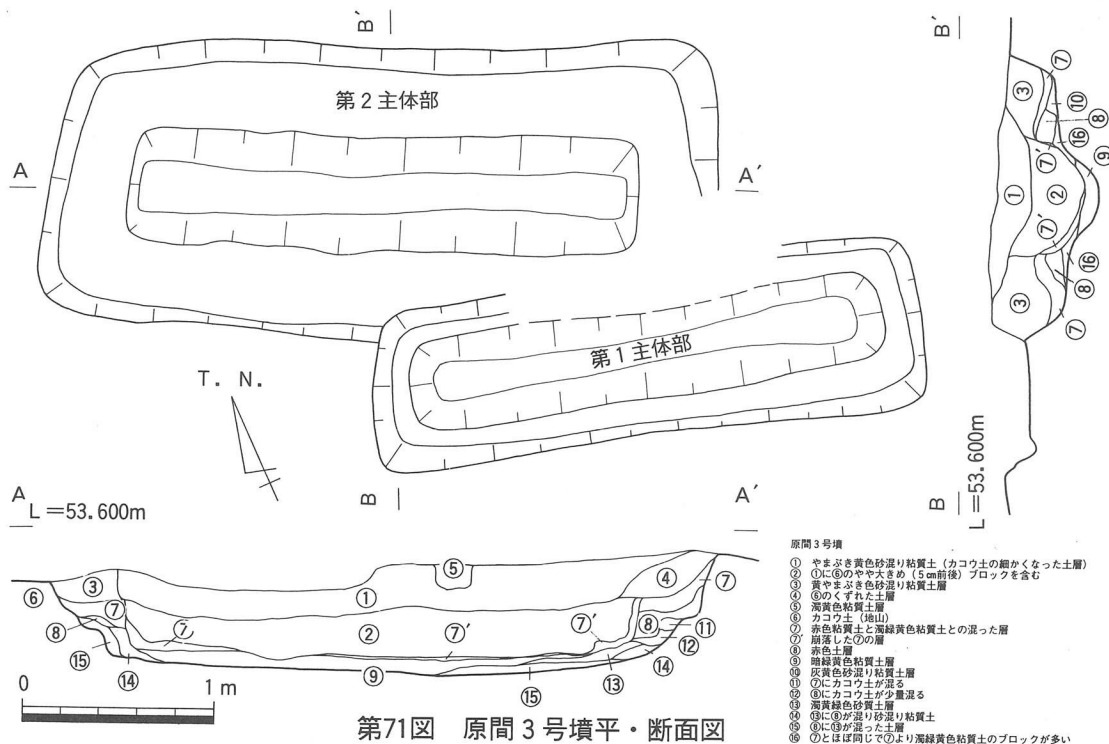


写真64 原間3号墳主体部検出状況(南東から)

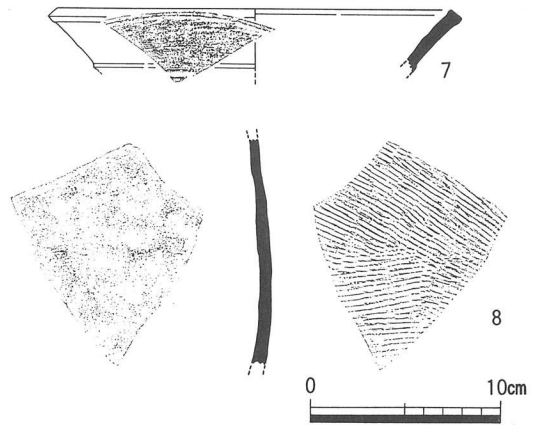
写真65 原間3号墳第2主体部検出状況(南東から)



っていた墳裾から想定すると、墳径約15mの円墳であることが解った。土層を観察すると、腐食土直下に花崗土の地山がひろがり、地山整形によってのみ築造されたか、盛土があったけれど、後世に流出したのかは不明である。

(3) 埋葬施設 (第71図)

概ね東西方向に主軸をもつ2基の主体部は、標高53.5mの平坦部に造られている。主体部1は2段墓壙で、主体部2の一部を切り崩して造られている。規模は長辺約2.9m、短辺約0.9m、深さ約0.6mを計る。長軸主軸はN-76°-Wを取り、土層断面からU字状の割竹形木棺の痕跡をもつ土壙墓と判明した。主体部2は主体部1に先行して造られ、第1主体部と同様に2段墓壙である。規模は長辺約3.5m、短辺約1.5m、深さ約0.6mを計る。長軸主軸はN-66°-Wである。墓壙は中央部をU字状に掘り、割竹形木棺を安定させ、周囲に赤色粘土を置き、固定している。さらに木棺全体を赤色粘土と白色粘土の混じった土で被覆している。



第72図 原間3号墳南周濠内出土遺物実測図

(4) 遺物

周溝内からは、多量の須恵器片と土師器片が出土した。その内、須恵器壺を第72図に掲載した。主体部2からは、長さ18.0cm程度の鉈が1点出土した。7は須恵器壺の口縁である。外面に左下がりの平行叩き痕が僅かに残っている。8はその体部である。外面に平行叩き痕が認められ、内面は無文の当具痕が確認できる。

原間4号墳

(1) 調査前の状況

原間4号墳は虎丸山から延びる丘陵が調査区内で北西方向と東方向に分岐するちょうど分岐点に位置し、調査区内では約54.5mの最高所となる。調査前に墳丘等は確認できなかった。

(2) 墳丘

遺構は主体部1基と周濠を検出した。ただし周濠は東西が流出しているために残っておらず、南北の丘陵稜線部分にのみ検出した。この南北に残る周濠から推定すると、墳径約14.6mの円墳であることが解る。墳丘はそのほとんどが流出しているために地山である花崗岩が露出していたが、僅かに北西部分に墳丘盛土と考えられる版築状の堆積土を確認した。4号墳の墳丘は丘陵部分の地形を生かしながら部分的に整形し、版築により墳丘を造ったものと考えられる。

前述した原間3号墳と原間4号墳の間には鞍部があり、この鞍部に両古墳を画するように濠が掘削されている。

(3) 埋葬施設

検出した主体部は1基で、長辺主軸をN-108°-Wとほぼ東西に持つ土壙墓である。規模は長辺が削平のために現存長約2.4m、短辺約1.0m、深さ0.15mを計る。墓壙埋土から木棺痕跡等は確認できなかった。

(4) 遺物

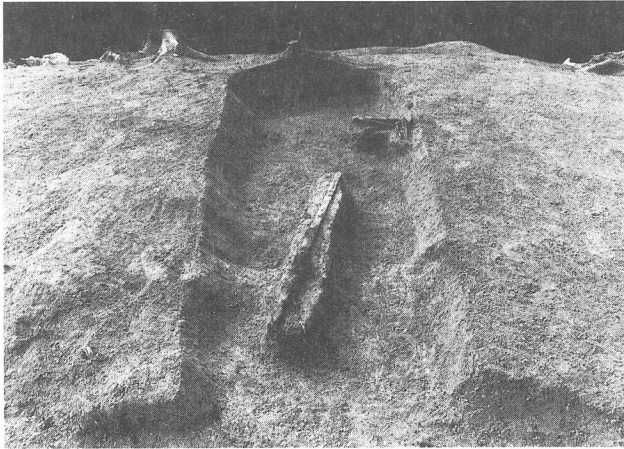


写真66 原間4号墳検出状況（東から）

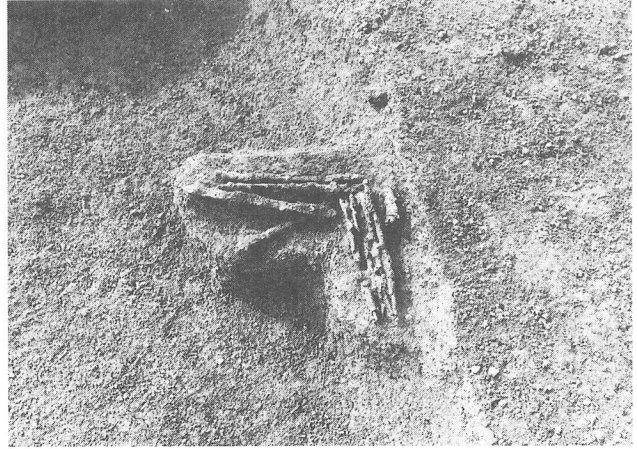
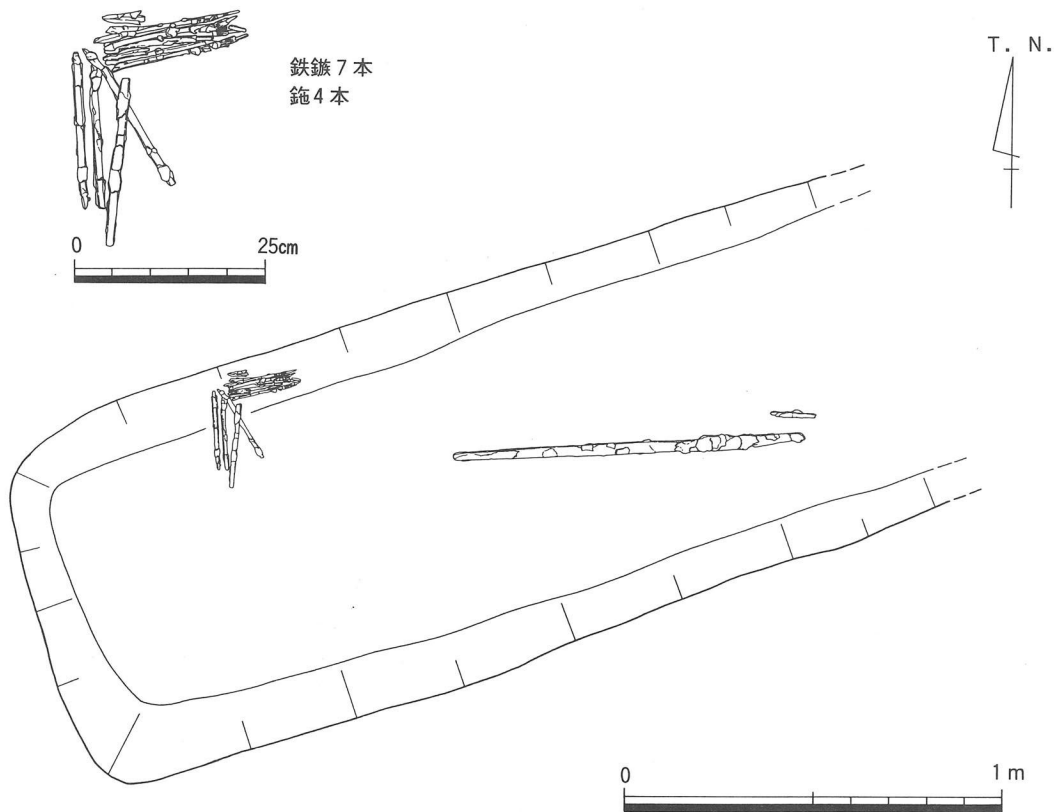
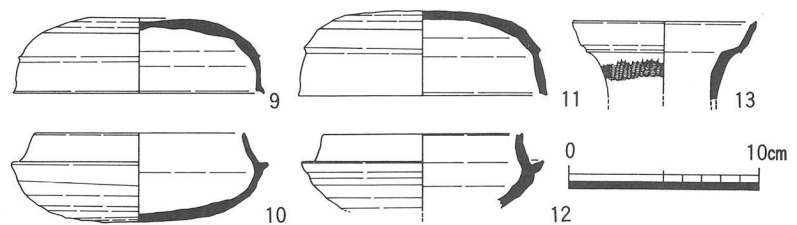


写真67 原間4号墳遺物出土状況（南から）



第73図 原間4号墳平面図及び遺物出土状況

墓壙内からは北西コーナー部分で鉄鍬9点，鉋4点が纏って出土し，ほぼ中央部では鉄刀1点が出土している。鉄刀の柄部分が東方向に向くことから頭位は東と考えられる。また，周濠からは須恵器及び鉄鉾が出土している。



第74図 原間3・4号墳間濠内出土遺物実測図

原間3号墳と原間4号墳間の濠から須恵器・土師器が出土している。

9・10は須恵器坏蓋, 11・12は須恵器坏身である。11・12のように全体にやや厚手で、しっかり作られているものと9・10のようにやや薄手に作られているものがある。天井部及び底部のヘラ削りは1cm以内と細い。13は須恵器甕である。頸部外面に波状文が施されている。

原間7号墳

(1) 調査前の状況

原間4号墳の頂部から南東方向に延びる傾斜面で、標高約50mに位置する。僅かに平坦地が確認できる程度であった。

(2) 墳丘

西丘陵の分岐点から南東方向に延びる尾根上のやや下った部分で7号墳を検出した。検出した遺構は尾根線に直行するように主体部が1基と主体部より尾根の高い部分で周濠を検出した。周濠は尾根に直行するように検出し、端部が屈曲する。流失により検出面は全て花崗岩が認められ、版築等の盛土は検出できなかった。

(3) 埋葬施設

主体部は箱式石棺で、丘陵の低い部分が削平により確認できなかったが、おそらく2段掘りを呈していると考えられる。

長辺主軸はN-134°-Wに取る。一段目掘方は南東側が流失されており不明である。2段目掘方の規模は南西小口が約0.65m、北東小口が約0.55mで、長辺が約2.15mを計る。また、石棺内南西小口内法は約0.3m、北東小口内法は約0.25m、長辺内法が約1.65m、深さ約0.2mを計る。

石棺石材は西側側壁中央に使用されている砂岩を除き、その他が花崗岩の板石を使用している。

南西小口は30cm程度の板状の花崗岩を直立して置き、側壁によって挟み、北東小口は35cm程度の板状の花崗岩に側壁をぶつけるように造られている。北西側壁には20~40cm大の板状の花崗岩を5枚直列に並べ、南東側壁には20~50cm大の花崗岩を4枚直列に並べている。蓋石は水平に置かれているのではなく、南西小口から一部を重ねるように置き構築している。蓋石除去後に南西小口及び北西側壁と掘方の間に部分的に粘質シルト層を充填しているのを確認した。しかし8号墳のように蓋石全体の被覆は確認できなかった。

(4) 遺物

遺物は主体部からは出土しておらず、周濠からのみ須恵器壺体部片が1点出土しているのみである。時期は不明である。

原間8号墳

(1) 調査前の状況

XI区(西丘陵)は全体的に痩せ尾根で、谷部の傾斜もきつい。このために原間3・4号墳ともに谷部

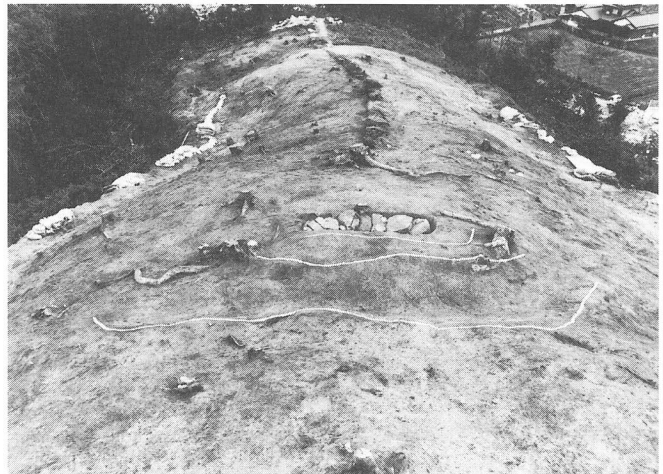
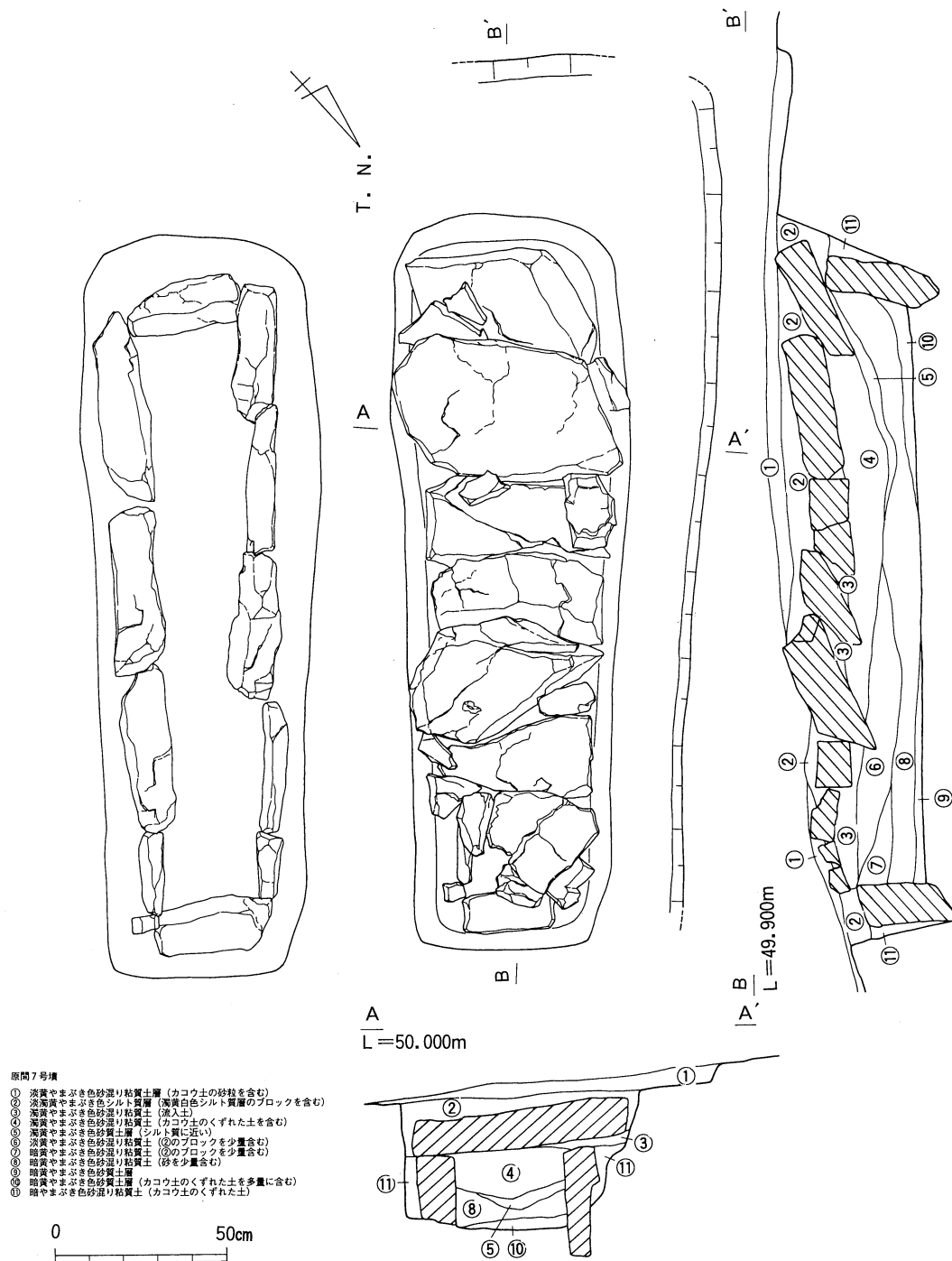


写真68 原間7号墳検出状況(西から)



の周濠が流失していた。この丘傾斜の斜面部、標高約48mに原間8号墳は位置する。

(2) 墳丘

原間8号墳は前述した7号墳の南斜面で検出した。8号墳主体部から南東方向に約5mの距離にあり、等高線に平行するように主体部1基を検出した。流失によりの墳丘盛土及び周濠はなく、検出当初は斜面部に僅かな河原石の散乱状態であった。

(3) 埋葬施設

主体部は箱式石棺で、長辺主軸はほぼ東西を取る。掘方の規模は南西小口が約0.5m、北東小口が約0.65mで、長辺が約2.0mを計る。また、石棺内南西及び北東小口内法は約3.0mで、中央部が約3.5m



写真69 原間7号墳検出状況（北東から）



写真71 原間8号墳検出状況（東から）



写真70 原間7号墳検出状況(蓋石除去後)(北東から)

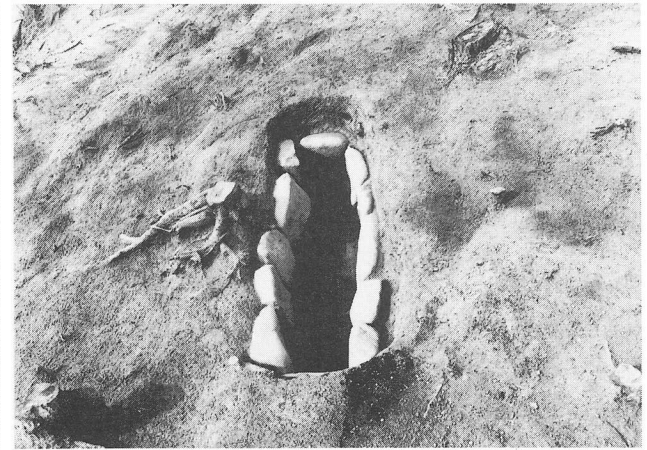


写真72 原間8号墳検出状況(蓋石除去後)(東から)

とやや胴張りを呈する。長辺内法は約1.6m、深さ約0.15mを計る。

石棺石材は7号墳とは違い全てが砂岩（河原石）を使用している。

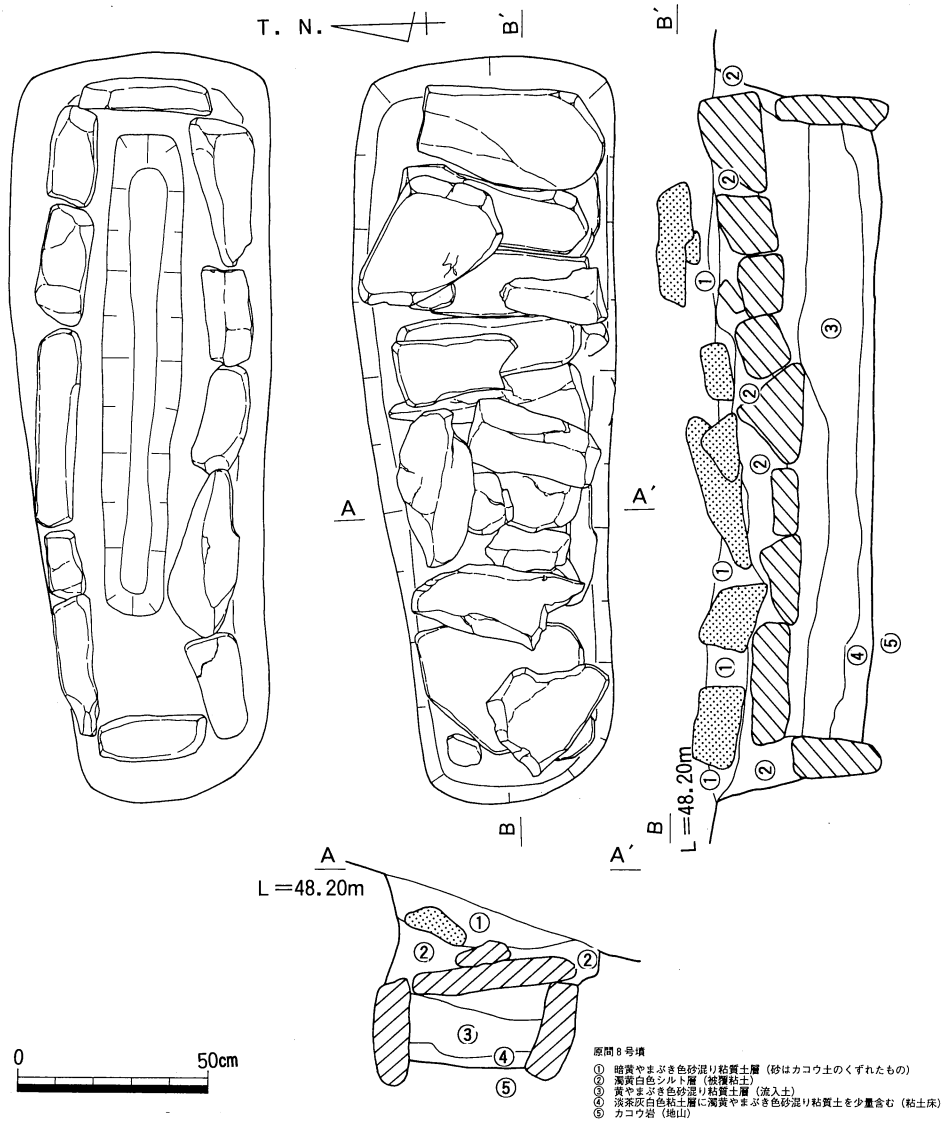
西小口は30cm程度の板状の河原石を直立して置き、側壁によって挟み、東小口は35cm程度の板状の河原石に側壁をぶつけるように造られている。北側壁には20～50cm大の板状の河原石を5枚直列に並べ、南側壁には20～40cm大の河原石を5枚直列に並べている。蓋石は20×50cm大の方柱状の河原石（砂岩）を水平に隙間なく置き、その上部に白色系のシルト粘土（第75図土層②）で蓋石を密封するように被覆している。さらにその上部に河原石（砂岩）を置いていたようである。

棺内床面は淡茶灰色粘土層を主とした土層を敷き、上面には僅かに「U」字状の痕跡が確認できた。

小口部分の掘方の規模から頭位は東と考えられる。

(4) 遺物

遺物が出土していないため、時期は不明である。



第76図 原間8号墳平・断面図

原間10号墳

(1) 調査前の状況

原間10号墳は、原間4号墳が検出された西丘陵Ⅺ区の尾根上のピークより70m東の調査区東端部の平坦地、標高約43.3mに位置する。平成9年度に尾根筋に沿って掘削した予備調査によって確認された弥生時代後期の竪穴住居跡の一部を壊し、古墳が存在することがわかった。

(2) 墳丘

遺構は、埋葬施設である土壙1基と周濠を検出した。ただし周濠は北側の谷に位置する部分（全体の1/6）が流失していたため、完全な形では残っていなかったが、南北に長い楕円形を呈している。このことから、北側の墳裾は確認できなかったが、東西の尾根筋に残っていた墳裾から想定すると、墳径南北約10m、東西約8mの円墳であることがわかった。土層を観察すると、腐食土直下に花崗土の地山がひろがり、地山整形によってのみ築造されたか、盛土があったが後世に流出したのかのいずれかと考えられる。

(3) 埋葬施設（第77図）・遺物

南北方向に主軸をもつ主体部は、東方向への緩斜面（標高43.2m）で検出した。主軸に直交する東西



写真73 西丘陵東部遺構検出状況（西から）

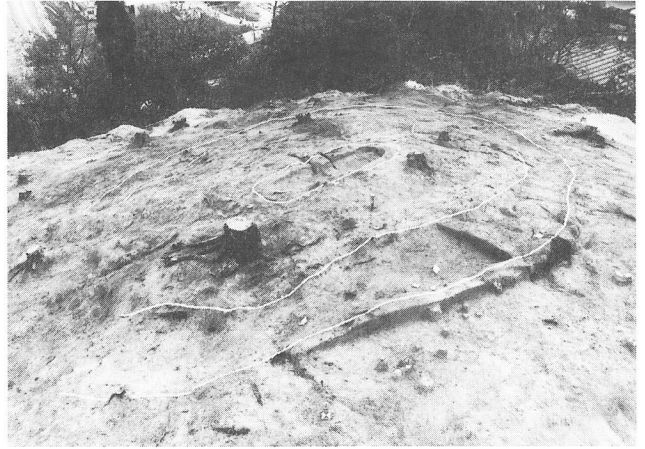


写真74 原間10号墳検出状況（西から）

方向の土層を観察すると、東半分の上層が削り取られており、このことから古墳築造当初は、平坦面に主体部がつくられていたことが確認された。内部構造は、土壙掘削後、底部に粘質土を敷いた上に、割竹形木棺を置き、その縁辺部に赤色粘土を貼り付けることで木棺を固定させ、埋め戻していたことが解った。原間3号墳の主体部2同様、赤色粘土が使われていたものの、この場合は木棺全体を覆う被覆粘土は確認できなかった。

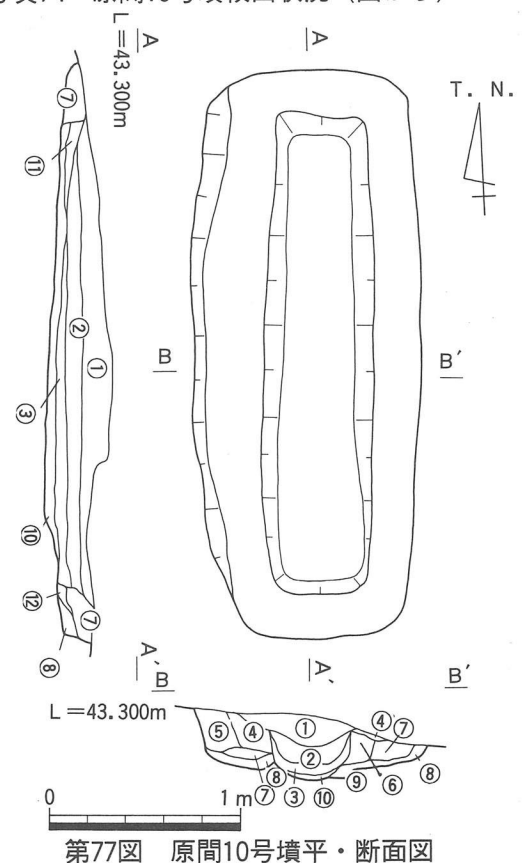
古墳にともなう遺物は出土していない。このため、築造時期の決定は困難であるが、上記のことから、原間3号墳の時期に概ね合致するかあるいはやや後出するものと考えている。

5. まとめ

今年度の原間遺跡の発掘調査の結果、丘陵部分で5世紀末から6世紀初頭の8基の古墳と6世紀末から7世紀初頭の原間2号墳の古墳を検出した。また、丘陵部先端部では弥生時代の竪穴住居跡をそれぞれ単独で検出した。

原間遺跡の東西丘陵で検出した弥生時代の竪穴住居跡は継続して建て替え等の痕跡が確認できなかったことと昨年度検出した弥生時代後期の集落跡との関連で検討しなければならないが、おそらく見張り用に一時的に使われたものと考えられる。

丘陵上で検出した5世紀末から6世紀初頭の古墳群はこの地域の首長墓の変遷を考えるにあたり、重要な位置を占めるものと考えられる。しかし前述した水系単位の首長墓系列を考える場合には今後の大内町及び白鳥町の古墳の研究が課題になる。また、この時期に粘土槨木棺墓、木棺直葬墓、土壙墓、箱式石棺墓といった多様な主体部構造があることも注目される。



第77図 原間10号墳平・断面図

樋 端 地 区

1. 立地と環境

樋端地区は、大川郡白鳥町字西藤井3449,同字寺前1816-2外に所在する。虎丸山から四方に延びる尾根のうち、北東方向の裾部の低丘陵上（標高28~35m）に調査区は分散している。調査区の東側には、阿讃山脈に流れを発する湊川がつくり出した沖積平野を望み、西隣には原間池、さらに古川の堆積地が広がっている。

地区内には、周知の遺跡として、神越古墳、神越桃山古墳が白鳥町史などで紹介されている。また、調査区Cの南東斜面部には、かつて6基の横穴式石室が開口していたとの言い伝えがあり、県内最東端の前期古墳である大日山古墳が近隣に存在することも踏まえて、この辺りは、古墳時代を通じて、政治的要地であった可能性が指摘される。

律令時代に入ると、地方制度が充実し、国の下に郡が置かれ、また官道として南海道が整備され、この辺りは、大内郡に属していた。西隣の原間遺跡内には、垣内（かきのうち）という小地名が、また、東側の湊川にかかる橋には神越との名前が残っており、ともに、郡衙の所在を想起させる地である。直接これにかかわる遺構、遺物は見つかっていないものの、前年度、原間遺跡では7~8世紀の掘立柱建物群が検出されており、郡衙の存在を説明する遺構として、また、大川郡東部でいまだ確定していない南海道のルートを推定する上でも注目される。

2. 調査の成果

樋端地区はA~E地区に調査区を設定し、調査を開始した。平野部のE地区を除くA~C地区は丘陵部を対象地区としており、調査前からC地区では神越桃山古墳、D地区では神越古墳が周知の遺跡として確認されていた。発掘調査の結果A地区では古墳（樋端1・2号墳）を2基検出した。B地区は予備調査で終了した。C地区では周知



写真75 樋端A地区遠景（西から）

の神越桃山古墳は検出されなかったものの弥生時代後期の土器棺墓を12基検出した。D地区では周知の神越古墳を検出し、さらにC地区と同様に弥生時代後期の土器棺墓を8基検出した。

樋端2号墳

(1) 調査前の状況

樋端2号墳は、樋端A地区の北方に延びる尾根上を南寄りに上った部分に位置する。調査前に尾根筋に沿って掘削した予備調査トレンチによって、周濠と主体部1基を検出した。

(2) 墳丘

遺構は、埋葬施設である土壙1基と、周濠を検出した。ただし周濠は、東西の谷に位置する部分が、流出していたため、完全な形では残っていなかった。このことから、東西の墳裾は確認できなかったが、南北に残っていた墳裾から想定すると、墳径約12mの円墳であることが解った。土層を観察すると、



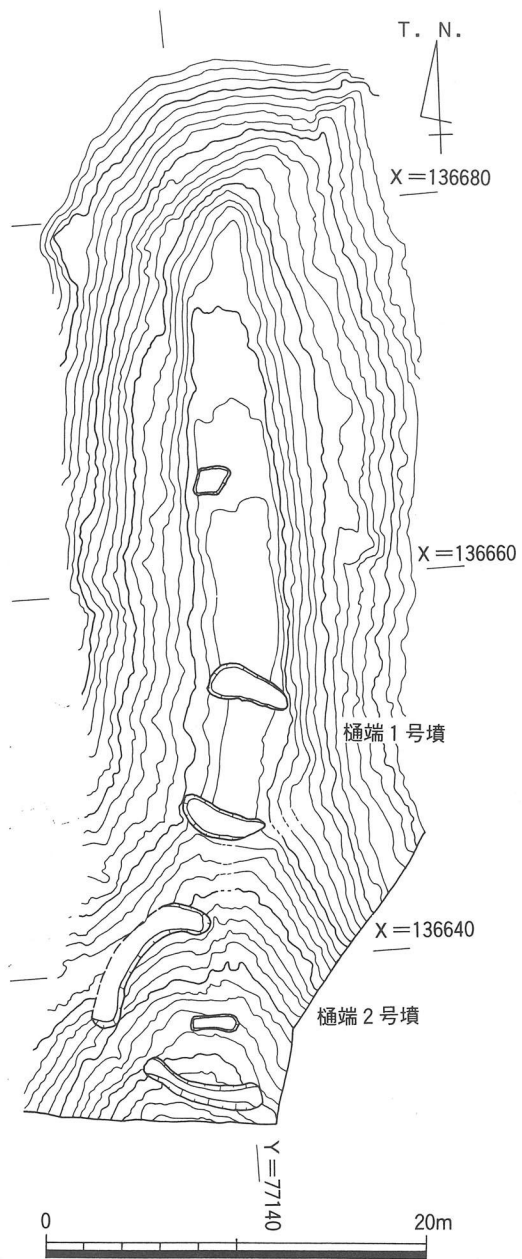
写真76 樋端2号墳検出状況（北から）



写真77 樋端2号墳周濠内遺物出土状況（北から）



写真78 樋端2号墳主体部遺物出土状況（北から）



第78図 樋端A地区地形測量図

腐食土直下に花崗土の地山がひろがり、地山整形によってのみ築造されたか、盛土があったが後世に流出したのかのいずれかと考えられる。

(3) 埋葬施設 (第79図)

概ね東西方向に主軸をもつ主体部は、標高39,7mの緩やかな斜面部に造られており、規模は長さが2.3m、幅が0.5mを計る土壙墓である。土層からは、木棺の痕跡を確認することはできなかった。

(4) 遺物

主体部内からは、鉄鏃3本と長さ105cmの鉄刀1本が出土している。周濠内からは、鋤先1点と土師器2点が出土している。

14は土師器壺の口縁である。頸部は直線的に外上方に延びるもので、外面に縦方向のへら磨きが、内面に横方向のへら磨きが施されている。15は土師器高坏である。坏部内面に放射状のへら磨きが施されている。

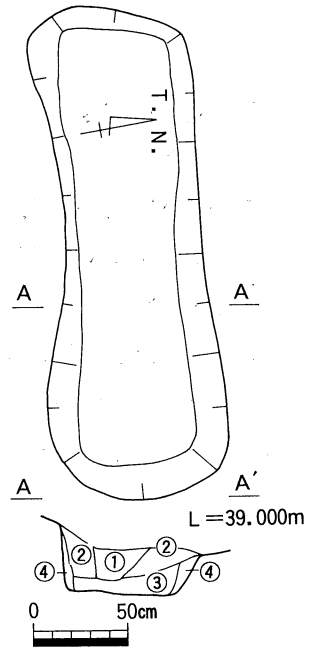
3. まとめ

樋端地区の調査の結果、原間遺跡東西丘陵での遺構の在り方と樋端地区の丘陵での遺構の在り方には違いが確認できた。

まず、弥生時代では樋端地区で土器棺墓を密集して検出したことである。原間遺跡の平野部の集落に伴う墓域は東丘陵西側裾部や竪穴住居に近接して造られていたものが、樋端地区では丘陵上に墓域を持つ点である。樋端C・D地区の立地から考えるとこの墓域を造営した集団はおそらく湊川沿いに展開したものと考えらる。

古墳時代では原間遺跡東西丘陵では5世紀末～6世紀初頭と考えられる古墳が造られていたが、樋端地区の丘陵上では6世紀末～7世紀初頭の古墳が造られていた点である。弥生時代と同様に湊川沿いに集落が展開したものと考えられる。

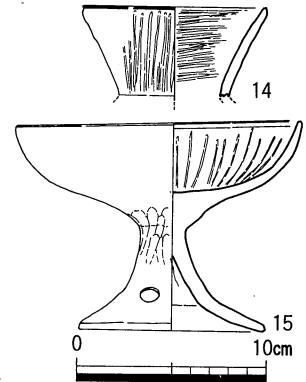
このように虎丸山から現在の原間池に延びる丘陵を境にして原間遺跡を中心に展開する集落と白鳥町の湊川沿いに展開する集落によって弥生時代・古墳時代の丘陵上の遺構に違いが確認できた。



樋端2号墳

- ① 黄褐色砂混りシルト質層
- (②より砂が多くやわらかい)
- ② 黄褐色砂混りシルト質層
- ③ 明黄褐色砂混りシルト質層
- ④ 汚黄褐色砂混りシルト質層

第79図 樋端2号墳平・断面図



第80図 樋端2号墳出土遺物実測図

成重遺跡

1. 立地と環境

成重遺跡は大川郡白鳥町白鳥，湊川によって形成された標高13m前後の矮小な沖積平野上に立地する。この湊川は現在の流路に固定されるまで平野部を編み目状に流下しており，幾つもの自然堤防を形成している。四国横断自動車道の路線はこの沖積平野をほぼ東西にトレンチを入れる形で延びることから，調査区は西側の湊川氾濫原面から東側の丘陵部分までの幅約70～80m，長さ約450mと長いものとなる。現地表面から弥生時代の遺構面までの深度は概ね約1m～1.5mと深くまた，ほぼ調査区全域にわたって2枚の遺構面が確認される。上層遺構面は古墳時代から近世，下層遺構面は弥生時代中期初頭から後期末までの遺構が確認される。また，今回の発掘調査において複数の埋没微高地を確認している。遺構は下層の弥生時代に限ってみると，住居跡を中心としてこの微高地上に集中し，調査区内で幾つかの集落単位に分かれる。上層遺構面ではこの微地形はほぼ埋没，平坦化し，微高地以外にも居住遺構が広がる様相を見せる。

周辺の主な遺跡としては以前より大量のサヌカイト石器が採集されていて弥生中期に属すると思われる池の奥遺跡が本遺跡の東約300mほど離れた開析谷に所在する。湊川を挟んで北西には白鳳期創建の白鳥廃寺が所在する。

本年度は国道318号線をはさんで東側から丘陵部分のD1a区・D3・D4区・D5区，微高地と低地部分のA3区・A4区・B区の調査を行った。西側では工法変更により現状保存が決定したF1・2区の東西橋脚部分，現状からも明瞭な微高地が観察できるG3区の調査を行った。

以下各調査区ごとに調査成果を述べる。



第81図 調査区割図 (1/4,000)

2. 東側調査区（A区～D区）の成果

(1) A3区の概要

A3a区は、国道318号線の東側に位置し、調査区への進入の関係で東西に細長く設定した調査区である。基本層序は、耕作土下に、第1遺構面ベース土である灰黄褐色混砂粘質土（弥生土器包含層）が堆積し、褐灰色砂質土、灰黄褐色混砂粘質土、黒褐色混砂粘質土（いずれも弥生土器包含層）を経て、地山である明黄褐色粘質土にいたる。

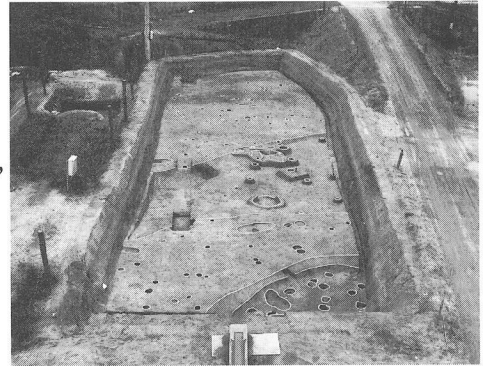


写真79 A3a区第2面全景(東から)

第2遺構面は、調査区中央付近から西に向かい緩やかに傾斜する地形を呈しており、この旧地形の影響か、東端でB区・A3b区にまたがる竪穴住居を検出しているが、西側は遺構密度が幾分稀薄である。弥生時代中期から後期の遺構を確認している。第1遺構面は、旧地形がほぼ埋没した段階の遺構面として確認しており、中世を中心とした時期の遺構を検出した。後述するSK01～SK06の6基の土坑が主要な遺構としてあげられる。

第1遺構面SK01～SK06 調査区中央やや西寄りで検出した土坑である。SK01～SK06はいずれも主軸を北東方向にとり、かつ、各北側短軸ラインをほぼ一直線に揃えた状態で検出した（南側の短軸ラインに関しては、予備調査により一部失われており、全容は不明である）。規模は第83図に提示したSK06によると、推定長約2.7m、幅約0.75m、深さ約0.3mを測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は下層に暗褐色混砂粘質土、上層に灰黄褐色混砂粘質土が堆積している。後述するSK01を除き、SK02～SK05もおおむね同様の平面形・規模・堆積状況を呈する。出土遺物は、第1遺構面ベース土からの混入遺物を除くと、土師質土器細々片が少量出土しているのみである。第83図は土師器杯である。底部はヘラ切り調整で、体部への屈曲部分に明瞭な段がみられる。これらの土坑の詳細な時期決定については課題を残すが、出土遺物の時期と周辺遺構の所属時期を考慮すると、13世紀を大きく逸脱しない時期の所産と考えられる。

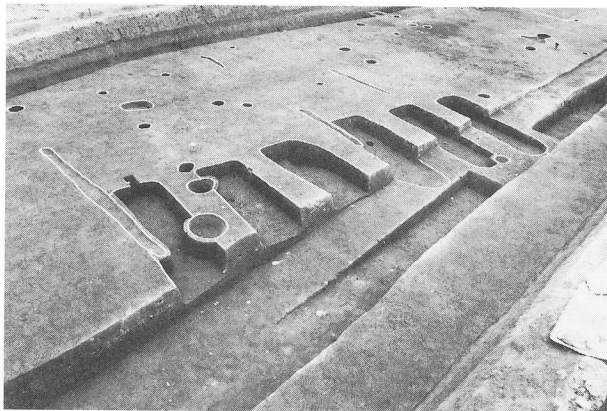
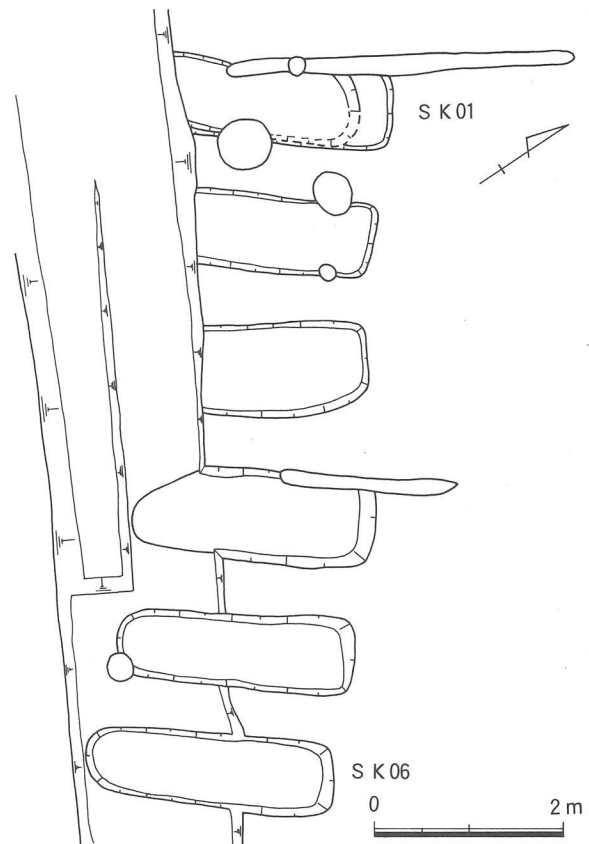
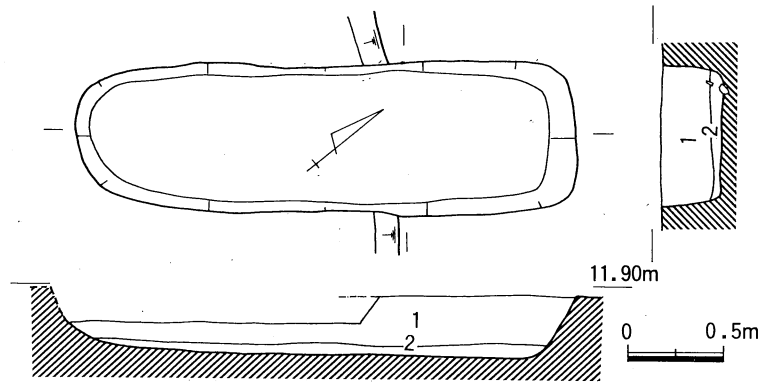


写真80 A3a区第1面土坑列全景(南西から)



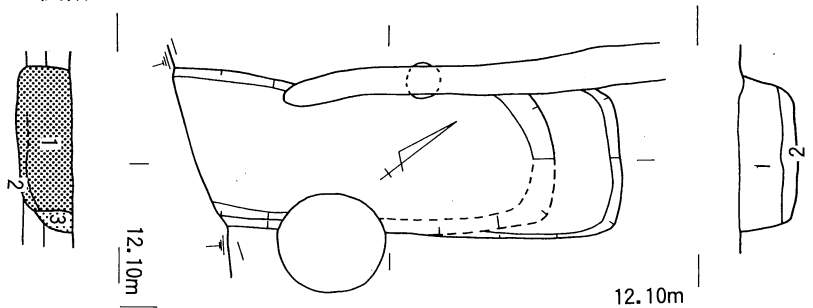
第82図 A3a区第1面土坑列平面図(1/80)

これら土坑群の性格であるが、まず検討する上で一つの切り口を提供すると考えられるSK01に関して触れたい。ここで注目すべき点が、自然埋没の想定が困難な堆積状況である。断面観察によると、薄いトーンの部分が開削・埋没し、次段階でこれに一部重複し、濃いトーン部分が開削・埋没したと想定できる。なお、SK02～06は濃いトーンの埋土と酷似しており、薄いトーンの埋土が確認できない点から、第二段階の開削・埋没と考えられる。ここで問題とすべき点が、層位の乱れが意図的な掘り直しを示す痕跡か否かという点である。規模・断面形状等の類似性により、偶発的一致を想定することは困難であり、掘り直しの痕跡と仮定したいが、その要因に問題が残る。様々な要因の想定が可能であるが、土坑の性格とリンクする重要な問題であり、現段階では平・断面図を提示するに留める。



1. 灰黄褐色(10YR 4/2)混砂粘質土、にぶい黄褐色・黄灰色ブロックを若干含む、2. 黄灰色(2.5Y 4/1)混砂粘質土

第83図 A3a区第1面SK06平(1/40)・断面図、出土遺物(1/4)



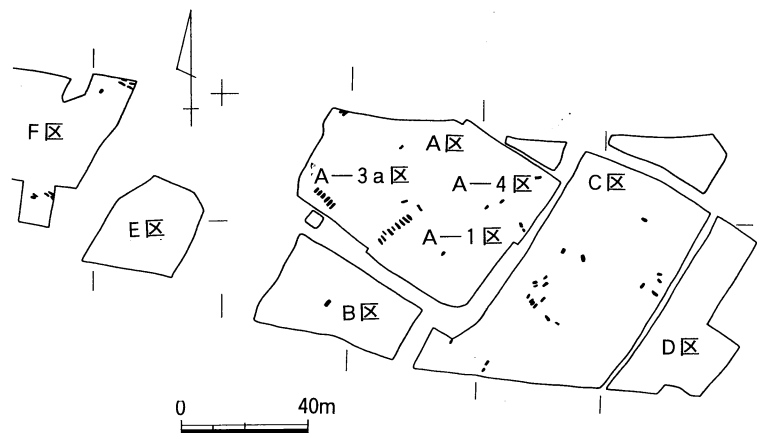
1. 灰黄褐色(10YR 4/2)混砂粘質土、にぶい黄褐色・黄灰色ブロックを若干含む、
2. 黄灰色(2.5Y 4/1)混砂粘質土、
3. 暗灰黄色(2.5Y 4/2)混砂粘質土、
4. 黄灰色(2.5Y 4/1)混砂粘質土

第84図 A3a区第1面SK01平・断面図(1/40)

次にSK01～06と同類型に分類できる土坑の配置図を第85図に提示する。これによると、遺跡内での偏在的な分布は認められないが、A3a区SK01～06とA1区SK01～09の位置関係、F区での配置状況等に何らかの規則性が確認できるが、ここでも提示に留めたい。

以上、SK01の平・断面図と遺跡内での土坑配置状況図を提示したが、土坑の性格を推測するには至らなかった。そこで、A区の土坑(群)から、その性格につながる特徴をまとめたい。①長軸長はばらつきがあるが、短軸幅は0.8m前後である。②断面形状は逆台形で、底面はおおむね平らである。③埋土は黒褐色粘質土が主体となり、地山粘質土ブロックが例外なく含まれる。④断面観察では緩やかな埋没を想定できない。

これらの特徴から導き出される遺構の性格として、土壙墓が想定できるが、詳細な検討は今後の課題とし、図面の提示に留めたい。



第85図 成重遺跡A～F区第1面土坑分布図(1/2,500)

(2) A4区の概要

国道より東側に位置し、層位堆積状況・周辺調査区の関係により、南から北へ緩やかに傾斜する地形が復元できる。基本層序は、耕作土下に近世から現代にかけての連続した水田層が堆積し（南側で0.4m、北側で0.8mの堆積）、第1遺構面ベース土である黄褐色混砂粘質土を経て、地山であるにぶい黄褐色粘質土ないし灰色砂礫層にいたる。第1・2遺構面いずれも、調査区中央に低地部分が確認でき、第2遺構面では深度が最深部で約0.6m、第1遺構面では約0.2mを測り、黒色粘質土を中心とした埋土の堆積が認められる。各遺構面ともにこの低地に制約される形で遺構が展開しており、第2遺構面では弥生時代、第1遺構面では古墳時代から中世にかけての遺構を検出している。

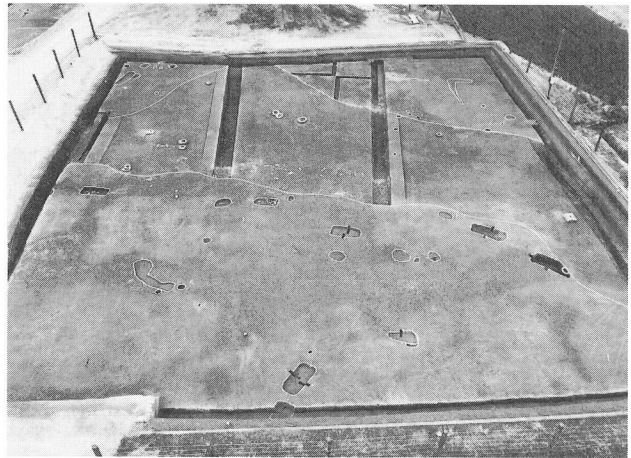


写真81 A4区 第1遺構面全景（東から）

第2遺構面SH01 調査区中央低地の東側で検出した竪穴住居である。平面形は楕円形に近い円形で直径3.8~4.2mを測る（成重遺跡では小型の竪穴住居に属する）。検出面からの床面までの深度は平均0.2mである。床面には17基の柱穴を確認したが、直径約2mの円周上に並ぶ柱穴が主柱穴にあると想定できる。ほぼ中央部分には長軸1.1m、短軸0.7mを測る楕円形の中央土坑があり、埋土内には赤褐色の焼土と炭化物が認められた。この土坑から北東方向に不定形の土坑がみられ、0.1mほどの深度にもかかわらず、多量の焼土と炭化物が堆積していた。中央土坑に堆積した焼土と炭化物を掻き出した際に生じた2次的な土坑である可能性が高い。

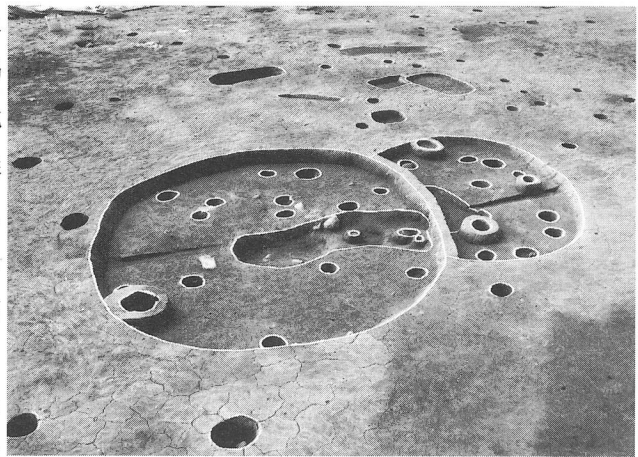
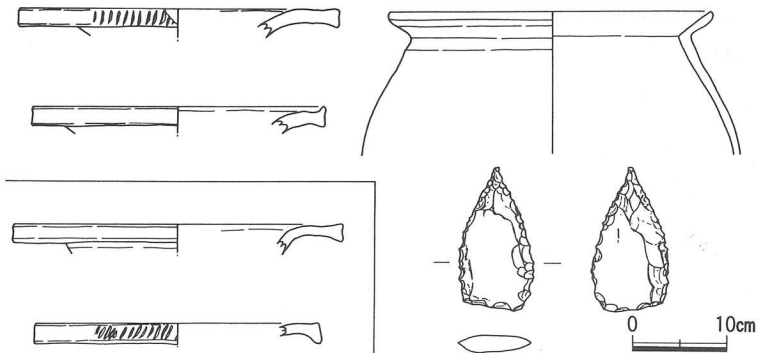


写真82 A4区 第2遺構面SH01・02全景（東から）

1・2は壺の口縁部である。共に凹線文はみられず、1には斜線文が施されている。2は頸部の屈曲が強いため、甕の可能性もある。3は甕で、くの字形に屈曲する頸部に短い口縁部がつく。4は石鏃である。凹基式石鏃も出土している。詳細な時期決定に問題を残すが、弥生時代中期中葉前半の所産と考えたい。

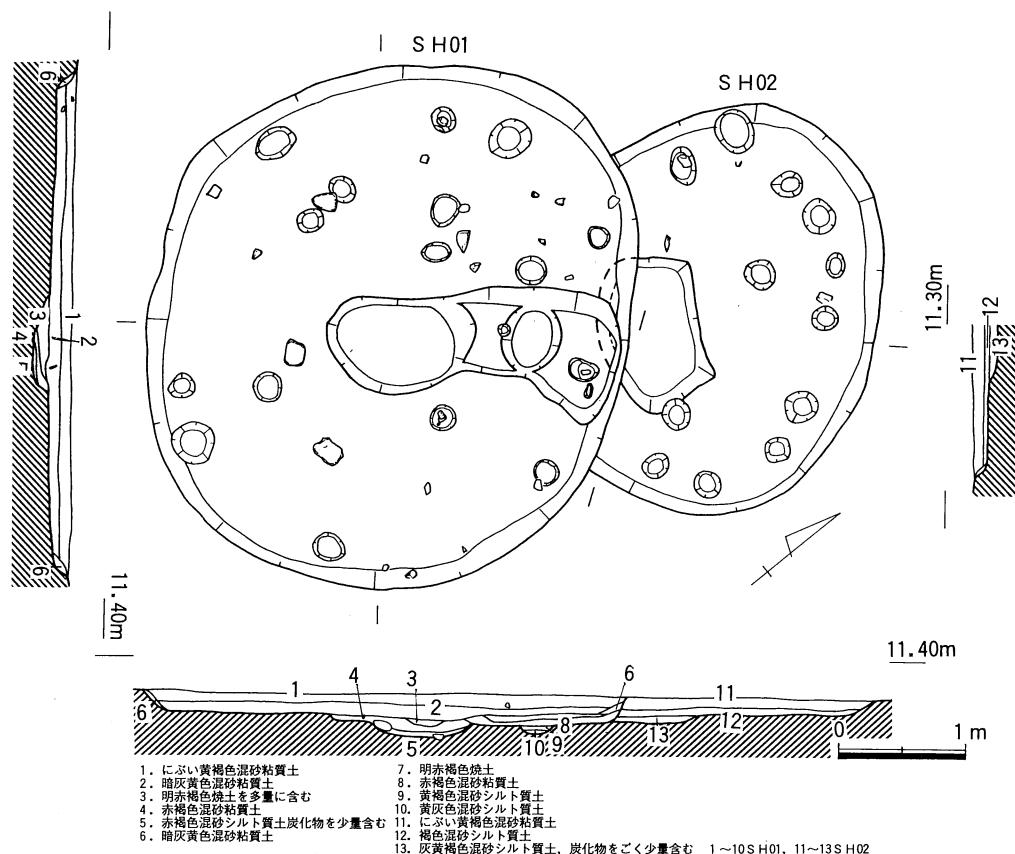


第86図 A4区 第2遺構面SH01・02出土遺物(1/4, 石鏃のみ1/2)

第2遺構面SH02 SH01に切られる形で検出した竪穴住居である。平面形は楕円形で、直径は3.3m~推定2.8m

を測り、検出面から床面までの深度は0.15mであった。柱穴は12基検出したが、主柱穴の決定に関しては今後の課題としたい。床面中央やや南よりで多角形を呈する中央土坑を検出し、埋土内には若干量の炭化物が認められた。

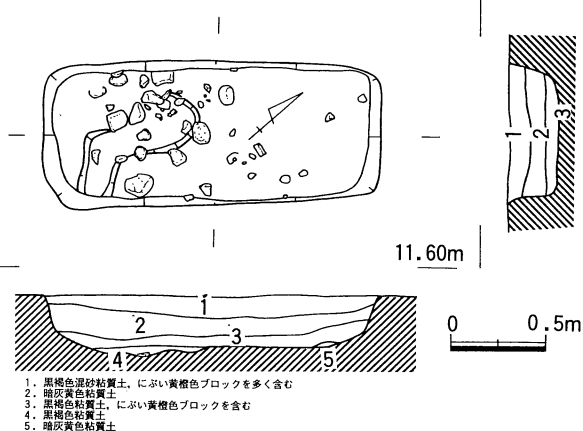
5・6は壺の口縁部で、共に凹線文は確認できない。6には斜線文が施されている。凹線文出現以前の弥生中期中葉前半に比定できる。また、両側端に挟りがみられる打製石庖丁も出土している。



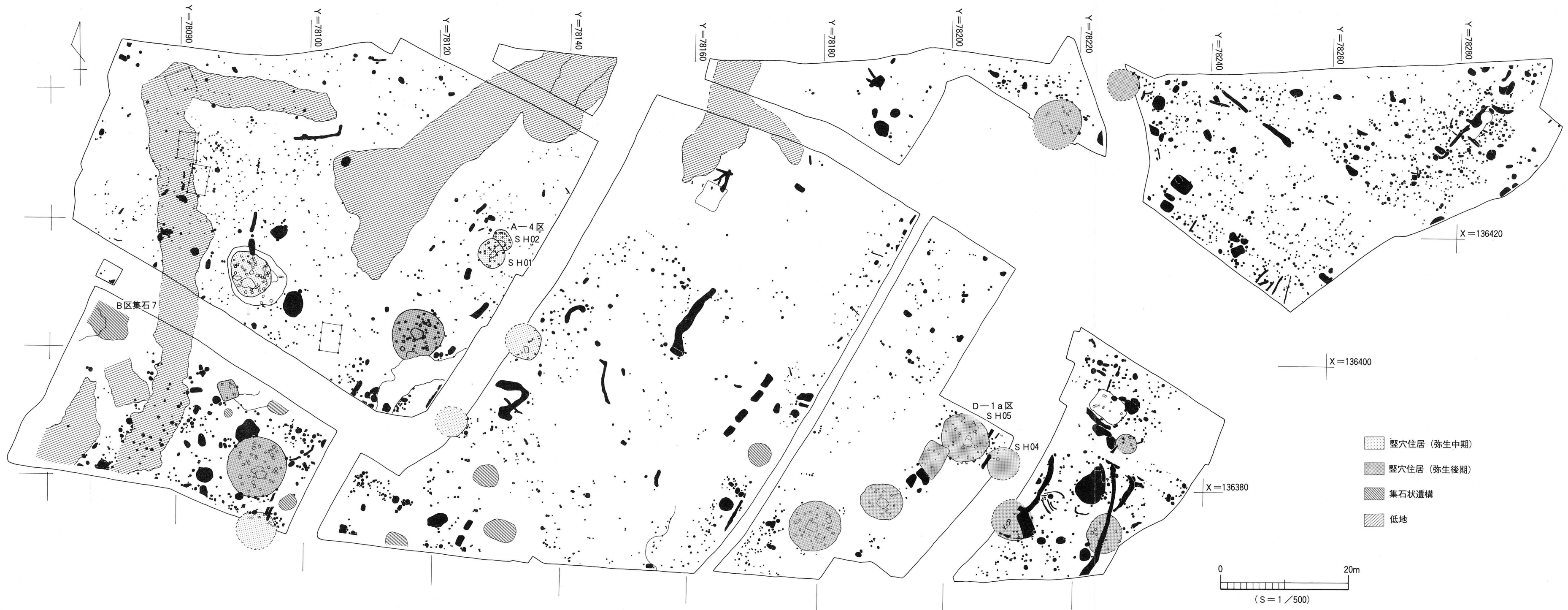
第87図 A4区 第2遺構面S H01・02平・断面図(1/60)

第1面土坑群 調査区中央の低地東側に沿う一群、B区土坑列からの一団及びC区からの一団を確認した(第85・95図参照)。各群で規模に多少の相違があるが、ここではS K06の平・断面図を提示する。規模は長さ1.8m、幅0.75m、深さ0.28mを測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は3層だが1・2層はほぼ同一層で、A-3a区の土坑群とほぼ同様の堆積状況を示す。規模は異なるが、平面形・埋土等が酷似した土坑として、S K(01)・02・05・14・15・16・22等があげられる。また、B区土坑列の北端に位置するS K16は長さ2.4m、幅0.8m、深さ0.15mを測り、B区土坑列の大型に属する土坑と形状・規模堆積状況が一致する。

各土坑から土師質土器細片が出土しているが、詳細な時期決定に耐え得る資料ではない。同一遺構面で平面形の異なる土坑(埋土には類似性が認められる)から12世紀後半~13世紀の出土遺物が確認でき、これら土坑群も、おおむね当該期の所産と想定できる。



第88図 A4区 第1遺構面S K06平・断面図(1/40)



第89図 A区~D区 第2面 遺構配置図 (1/500)

(3) B区の概要

基本的には南からA区へ延びる埋没微高地上の調査区である。第2遺構面は東の微高地頂部から西へ傾斜し、調査区中央に南からA3区へ向かって延びる幅約8m、深さ約30~40cm程の浅い低地を挟む。昨年度の南半分の調査で微高地上からは弥生中期の5m程の円形竪穴住居1棟、後期の10m程の大型円形竪穴住居1棟検出している。また、竪穴住居に隣接して若干の掘り込みを伴う集石状遺構6・8、上記の低地を挟み掘り込みを伴わない集石状遺構7（以下集石7、集石と記す）を検出している。

第2遺構面集石状遺構7 昨年度の調査概報作成段階においてA~D地区において7基の集石墓が分布するという遺構検出時の認識をもっていた。昨年度のその後の調査、今年度の調査において幾つかの調査成果として異なる点が判明した。A~D地区の集石墓としたものはすべて埋葬施設の検出といった考古学的見知から積極的に墳墓と断定できるものは無い。また、これらが分布する集落内での位置関係は一定せず様々な性格をもった遺構と言える。現時点では墓という断定は避けて、石と土器が集中して見られるといった集石状遺構とすべきものである。

集石状遺構7は上記低地付近に検出した掘り込みを伴わない集石である。直径約第8m程の範囲に砂岩礫と弥生後期中葉の完形土器が多量広がった状態で検出した。第1遺構面ベース土である黒褐色シルト下に灰色系の粗砂層と灰色シルトからなる約25cm程の交互層より多量の後期中葉に属する土器と砂岩礫の出土を見る。この下層には微量の中期中葉~末に属する土器を包含する黄灰褐色シルト層が堆積する。1遺構面調査時に側溝より多量の完形に近い土器の出土を見た為に、掘り下げる前にトレンチを設定したが明確な遺構のプラン、落ちは確認されなかった。砂岩礫は第2遺構面ベース土である黄色シルト中に包含されるものと法量、円磨度は同じで、中央部にやや集中してみられる。後期中葉の完形土器は幾つかの単位で分かれ中央礫集中部分の周りに確認される。出土状況や後述する土器群の帰属時間幅から東側の居住域である微高地に隣接した土器廃棄のエリアと認識する。砂岩礫は竪穴住居等の施設を構築する際に生じたものをこの場所に廃棄したと想定する。

出土した土器は完形を中心に全器種図化した。

壺は広口壺、長頸壺、細頸壺が見られる。12の細頸壺は胴部上半に最大径をもちかなり胴張りの形態を示す。甕の口縁部形態は比較的古く位置づけられる肉厚で面をもち短く屈曲するタイプ15, 17, 18。そしてこれらに後出する段階に位置づけられる口縁部の屈曲が鋭く口縁内面が水平に近くなるもの16, 19な

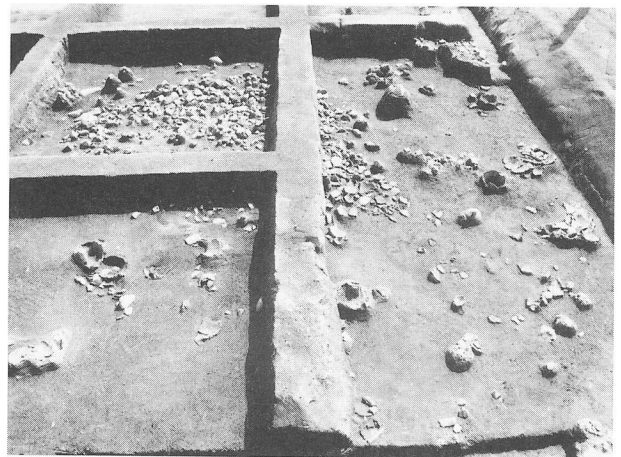
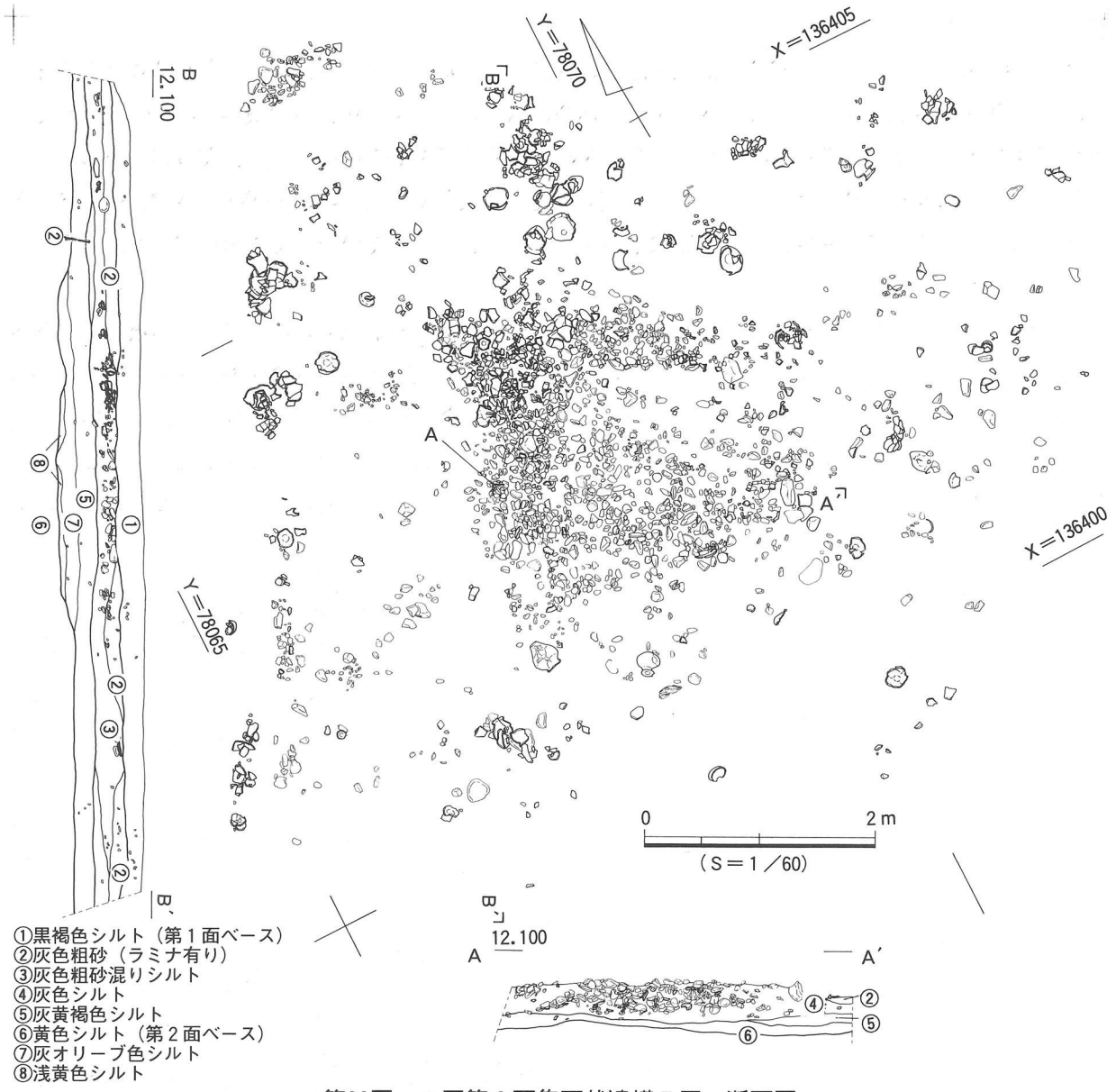


写真83 B区集石状遺構7検出状況(北から)



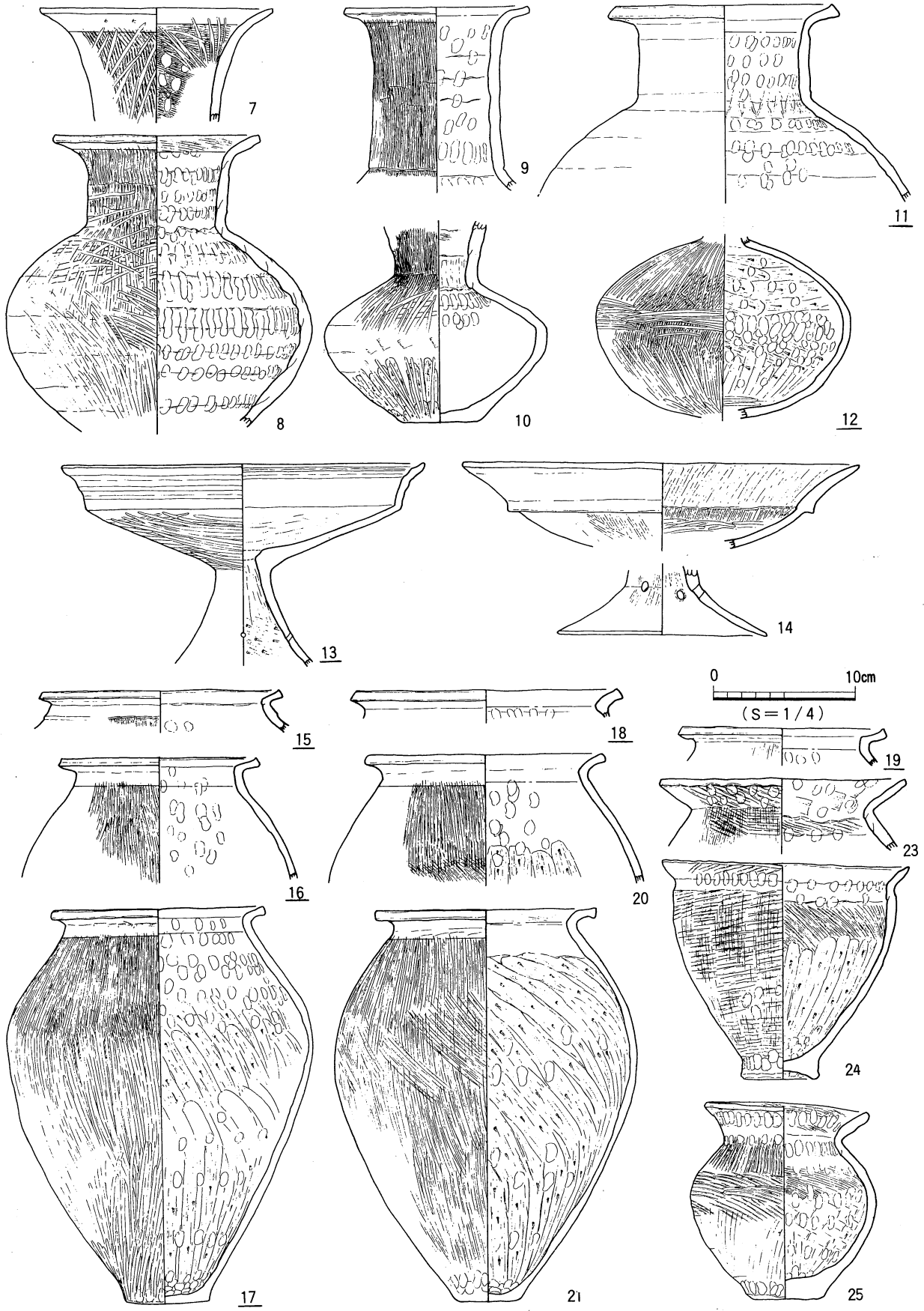
写真84 B区集石状遺構7土器出土状況(西から)



第90図 B区第2面集石状遺構7平・断面図

どが見られる。20, 21はこれら土器群の模倣形態である。胴部外面にタタキを残す22, 23などもある。高坏では屈曲部分より上半が発達する13や、赤色顔料が付着している装飾高杯14は後期前葉のものに比べ屈曲部の下方への突出があまくなっている。後期後半～末にかけて盛行する口縁端部直立する鉢形土器を伴わない点も注意される。角閃石を多量に含み茶褐色系の胎土をもつ高松平野からの搬入品は広口壺, 細頸壺, 高杯, 甕が確認できる (番号下線の土器)。

これらの搬入土器を編年的に位置づければ大久保徹也氏の下川津Ⅱ式からⅢ式古段階に併行する土器群と位置づけられ、弥生後期中葉のある程度時間幅をもった単位資料と言える。今後、こういった搬入土器経路, 時期と在地産の土器編年的位置づけが必要となろう。



※下線は角閃石を含み茶褐色系の胎土を持つもの

第91図 B区第2遺構面 集石状遺構6 出土遺物実測図

(4) D1a区の概要

D1a区は本遺跡東の丘陵部分と沖積面との変換点に位置する。昨年度調査D1区部分を拡張する形で家屋が撤去された部分を調査した。現地形、遺構面は東から西へ傾斜し、昨年度の竪穴住居群に続いて弥生後期中葉、後葉に属する竪穴住居を2棟検出した。D4区においても弥生後期後葉、直径約7m程の円形の竪穴住居を1棟検出しており、この丘陵裾の緩斜面に列状に竪穴住居が集中する。

第2遺構面SH04 大半が現道部分に延びる為正確な規模は不明だが概ね5m程の平面形態が円形を呈する竪穴住居と思われる。上面は中世包含層によって削平をうけているが25cmほどの掘り込みが壁面土層より観察できる。支柱穴は4穴と考えられ、調査区内では1穴のみ確認している。西側にベース面の花崗岩パイラン土を削りだしすることによって小規模なテラスを造り出している。壁溝はこのテラス部分で途切れる。覆土、床面からの出土遺物いずれも細片で支柱穴から全形を伺い知れる遺物が出土した。図化したものはいずれも支柱穴からの出土遺物である。25の甕形土器は胴部のかなり張った形態を呈し、内面に明瞭な接合痕を残す。胴張りの形態から後期末の時期が与えられよう。

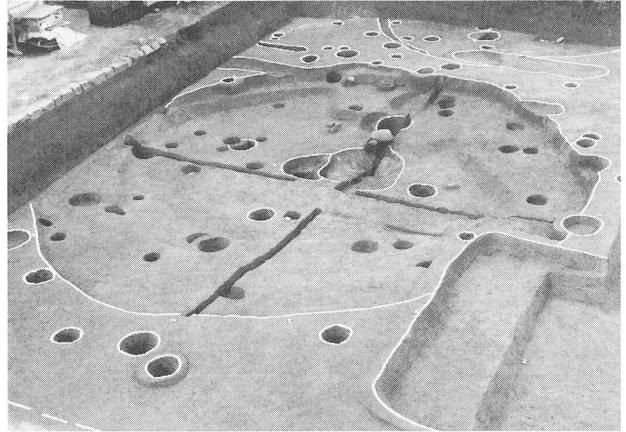


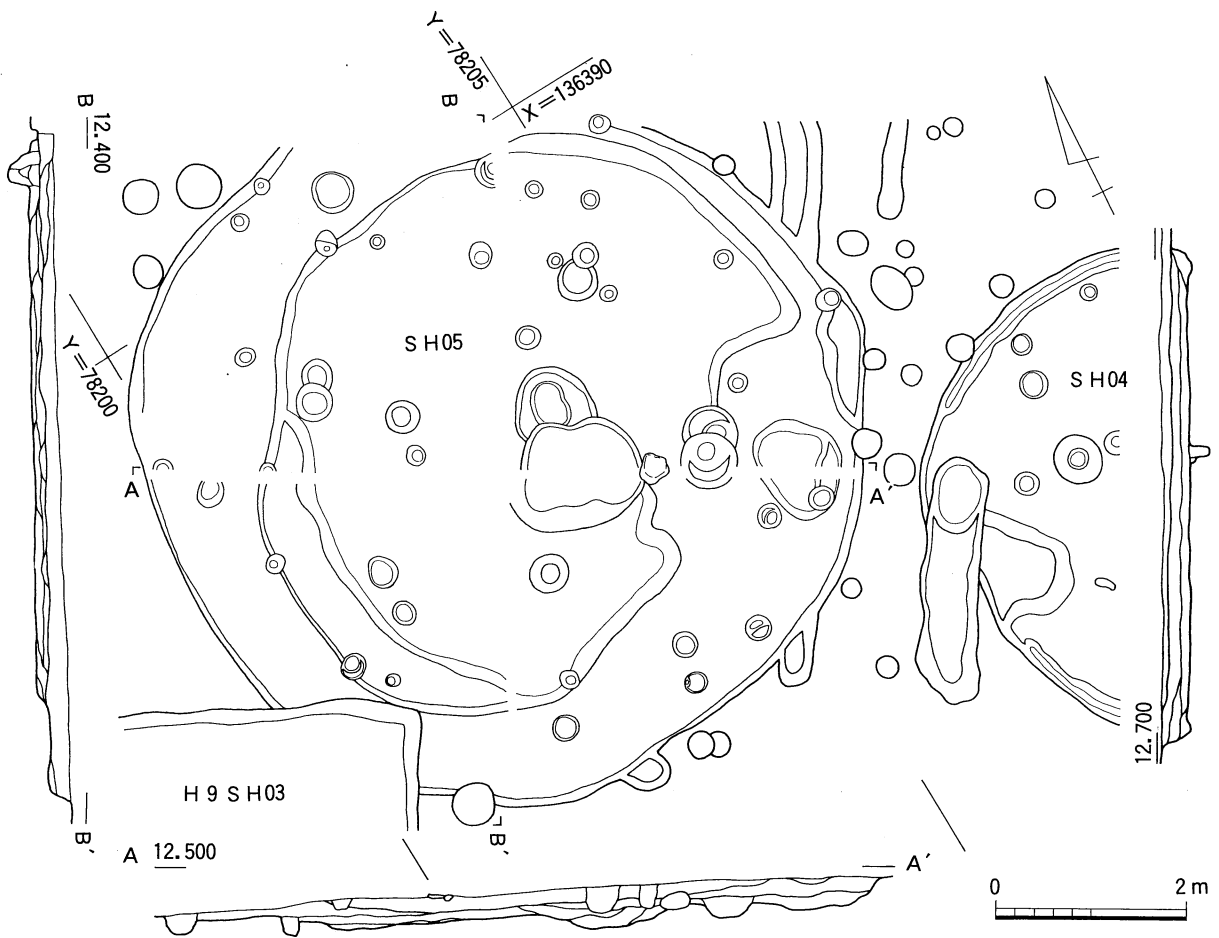
写真85 D1a区第2面SH04・05検出状況(西から)

第2遺構面SH05 SH04の西側で検出された直径約8mの円形の平面形態を呈する竪穴住居である。周囲に地山削り出しのベッド状遺構をもち、東側の部分のみ内側に突出する形態を採る。前述したように緩斜面に立地する為か検出面から東側の床面は約30cm程の掘り込みを確認できる。支柱穴は4穴で周囲に小規模な柱穴が巡る。床面は2枚確認することができ、中央ピットも2基切り合った状態にある。2次床面は1次床面がある程度埋没した後、この上に黄灰色系の粘土質土を敷き詰めることによって造り出されている。このときにベッド状遺構は完全に埋められている。切り合い関係より支柱穴は西側の2はそのままに東側の2穴のみ新たに造られたと考えられる。この4穴の支柱穴の位置と西側のベッド状遺構の位置関係が西側と東側では異なることから西側へ平面プランが拡張されたと考えられる。また上面の2次床面時には焼失

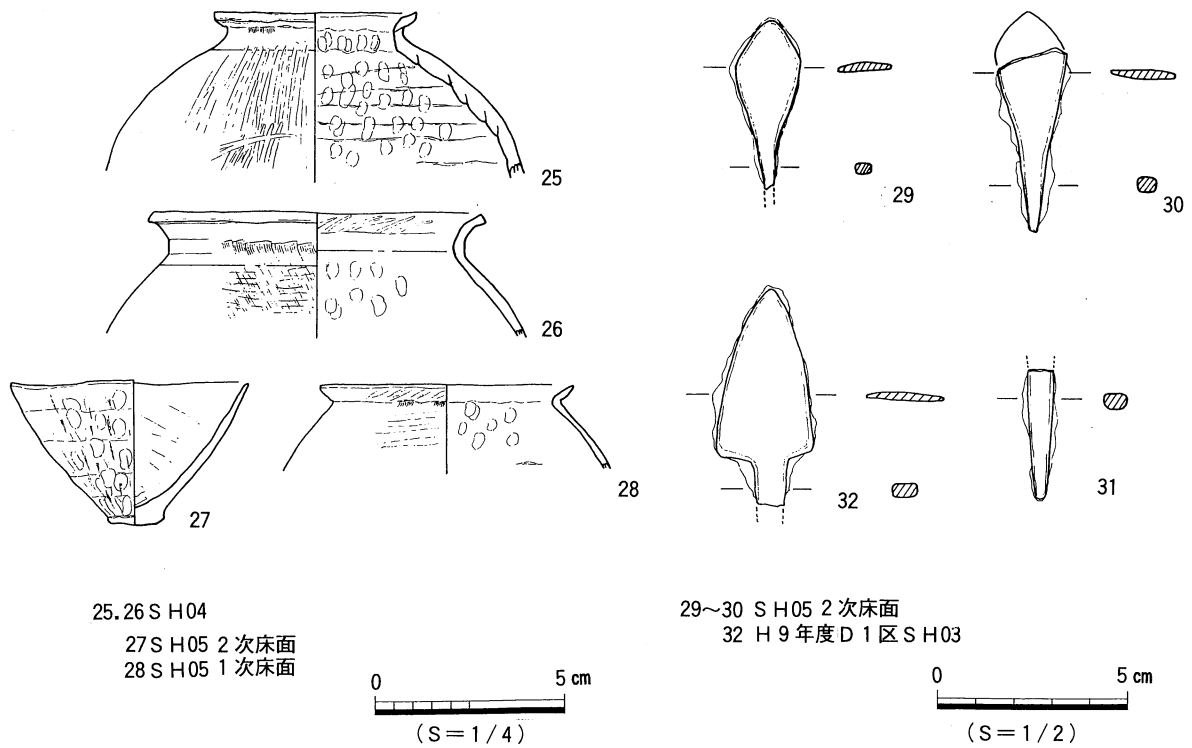


写真86 D1a区第2面SH05炭化材検出状況(南から)

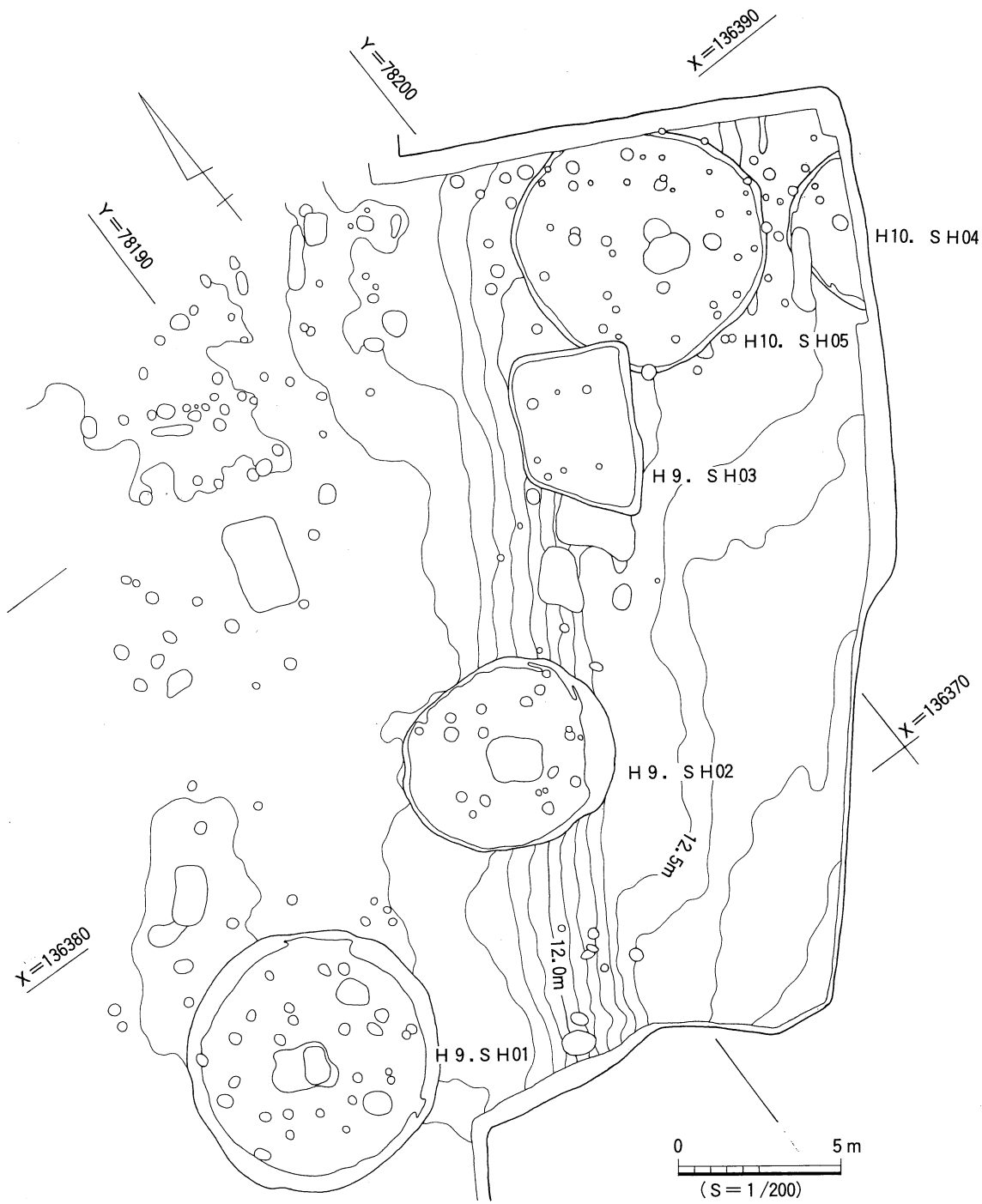
家屋として検出された。炭化材は南半部分に集中して見られほとんどが中央に向かって倒れた状態であった。この垂木と考えられる炭化材に僅かながら直交する横木と考えられる炭化材も確認している。出土遺物は1次床面廃絶時には遺物を持ち去った為か土器の小片しか確認されなかった。2次床面廃絶時には焼失家屋ということもあり比較的完形に近い土器が中央ピットの東西両側にやや集中して検出され



第92图 D1a区第2面SH04·05平·断面图



第93图 D1a区第2面SH04·05出土遺物実測图

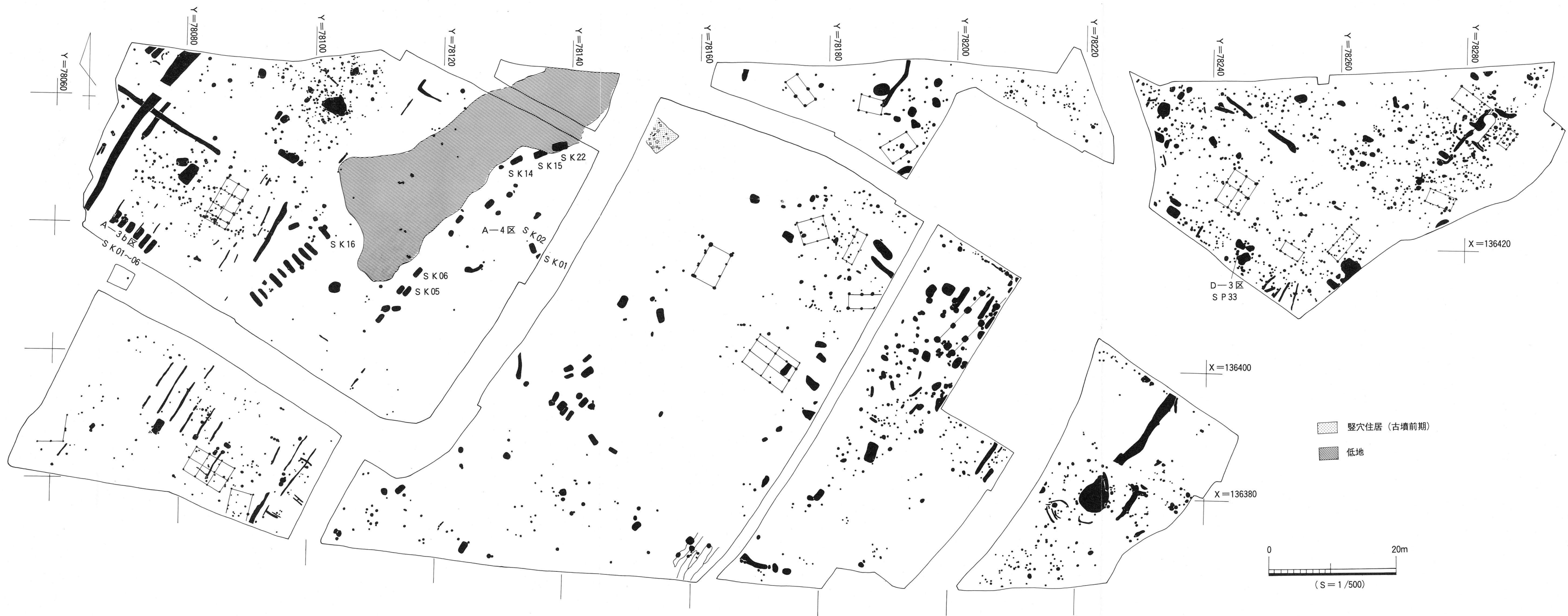


第94図 D1区D1a区 竪穴住居群平面分布

た。この2次床面からは鉄鏃3点, 中央ピットより鉄片が出土している。

図化した遺物は1次床面出土の28の甕, 2次床面出土27の鉢, 柳葉式鉄鏃29~313点である。4の甕は小片であるため位置づけが困難であるが, 3の鉢は丸底化の傾向を示しつつも平底を維持し, 器高が低くなっていない点から後期後葉に位置づけられよう。29~31の鉄器はこの時期に帰属する。8は昨年度調査の隣接するSH03出土の凸基式有茎の鉄鏃である。

SH05では比較的鉄器が出土し, 昨年度調査のSH01SH03からも鉄鏃や鉄器類が出土している。成



第95図 A区~D区 第1面 遺構配置図 (1/500)